

浄土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一冊）
昭和十四年四月二十八日運輸省特別掛承認
昭和十五年五月十五日印刷
昭和三十三年十月

第二十四卷 第



七月号



最新刊

童話学入門

B 6 360 頁 価 480 円 50 円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山憲尚 著

- 童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- 内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保 1-400

発行所 東京文化研究部出版部

取次所 日本童話協会

浄土七月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

カット

加藤金一・原比呂美

極楽……………(2)

お経オンパレード……………伊藤辰造……………(8)

蓮華花咲く……………戸松学瑛……………(4)

—お盆とおせがき—

幽霊談義……………村上博了……………(38)

童話おりづる……………きりぶち・あきら……………(18)

比叡のみ山黒谷をたずねて……………大橋俊雄……………(22)

近代高僧伝……………鈴木成元……………(26)

実話逆縁を喜びつつ……………大門俊我……………(34)

夏の衛生相談……………杉田暉道……………(29)

歌壇……………岩野喜久代……………(13)

弁天さま……………扉の御法語……………(36)

心の鬼……………汽車の中で……………(28)

座頭の妻……………七夕あれこれ……………(7)

庶民と念仏……………一瀬直行……………(14)

浄土

七月号

かなしきかなや、善心はとしどしにしたがひてうすくなり、悪心は日々にしたがひていよいよまさる。されば古人のいへる事あり、煩惱は身にそへる影、さらむとすれどもさらず、菩提は水にうかべる月、とらむとすれどもとられずと。このゆへに阿弥陀ほとけ、五劫に思惟してたて給ひし、深重の本願と申すは、善惡をへだてず、持戒破戒をきらはず、在家出家をもえらばず、有智無智をも論ぜず、平等の大悲をおこしてほとけになり給ひたれば、ただふかく本願を信じて念仏申さば、一念須臾のあひだに、阿弥陀ほとけの来迎にあづかるべき也。

法然上人御法語



極樂

かように、わたくしは聞いた。

あるとき、お釈迦さまがコーサラ国の首府、舎衛城の祇園精舎に御滞在在中のことであつた。そこには、おおくの優れたお弟子たちが、会座につらなっていた。ときに、お釈迦さまは、長老の舎利弗に対して、かようにお説きになられた。

これより西の方、十万億の仏の国をすぎて世界がある。極樂という。その国にみ仏ましまして阿弥陀仏と申しあげる。いま、現に御説法中である。舎利弗よ、かの国を何故に極樂と名づくるかという、その国の人々は、いかなる苦しみもしらず、ただ、もろもろの楽しみを受けているからである。

また、舎利弗よ、極樂には、七重にめぐらした玉垣や、七重にたれさげたかざり網や、七重に植えた並樹があつて、みな四つの宝によって作られている。この故に極樂というのである。

また、舎利弗よ、極樂には、七つの宝より成っている池があり、その中には、八つの功德のある水が充ち満ちている。池の底は純金で布きつめてある。その四方には、金、銀、瑠璃、玻瓈をくみ合せて成った階段があり、うつくしき楼閣につらなっている。その楼閣もまた、金、銀、瑠璃、玻瓈、赤珠、瑪瑙で飾られている。池の中には車輪のような大いなる蓮華が咲き競っている。そして花々は、青色は青の光を、黄色は黄の光を、赤色は赤の光を、白色は白の光をそれぞれはなつて、清く馥郁たる香りをただよわせている。

また、舎利弗よ、かの国では常に天には妙なる音楽が鳴りわたり、地には黄金色に照り映えて、昼夜六たび、天の曼陀羅華が光かがやきながら降ってくる。人々は、朝まだき、華皿に、かぐわしき色とりどりの花を盛り、あら

ゆるみ仏のみ国に遊んで、かずしれぬみ仏を供養する。還り来たりて食事を取り、しづかに行道をするのである。舍利弗よ、極樂には、かような功德莊嚴が成就せられているのである。

また次に、舍利弗よ、かの国には、種々の珍しい色とりどりの鳥がいる。白鵠、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命之鳥などが、それである。これらの鳥は、昼夜六たび、みやびやかな音色を出して鳴くが、それがそのまま、五根、五力、七菩提分、八聖道分というような、さとりの徳や力や、さとりに至る道を宣べつたえているのである。聞く人々は、みな、み仏を念じ、みおしえを行じ、真実の道をもとめて人々の和合にいそしんでいる。舍利弗よ、これ等の鳥は、罪の報いで現れたのではない。かのみ国には、地獄、餓鬼、畜生の三惡道がないのはもとより三惡道という名まえすらないのである。これらの鳥はみな、阿彌陀仏が、その御説法を宣べつたえしめんが為に、かりに現れたものである。舍利弗よ、かのみ国には、そよ風が宝の樹々や宝の飾り網にふきわたり、えもいわれぬいみじき音を出す。百千のすぐれた樂を合奏するかのようなのである。この風の音を聞く者は、また、おのずから仏を念じ、法をまもり、和合して道を修めている人々をおもう心を起すのである。舍利弗よ、極樂には、かような功德莊嚴が成就せられているのである。

舍利弗よ、汝はいかに思うか。かのみ仏をば、何故に阿彌陀仏と申すのであろうか。舍利弗よ、かのみ仏の光明は、十方の国々を限りなく照らし、何ものにも礙げられない。この故に、阿彌陀仏と申しあげるのである。また、舍利弗よ、かのみ仏の壽命およびその国の人々の壽命も限りがない。この故に阿彌陀仏と申しあげるのである。舍利弗よ、阿彌陀仏がみ仏となられてから、今に十劫というおもしろい計ることもできない久しい時を経ている。また、舍利弗よ、かのみ仏のみもとには、かず多くの羅漢や、菩薩も住んでいられる。舍利弗よ、かのみ国には、こうした功德莊嚴が成就せられている。

また、舍利弗よ、極樂国土に生れる人々は、不退転の位に入り、必ずみ仏となるべき菩薩の最高位に登るのであって、その数も算えうるところでない。舍利弗よ、このことを聞く者は、かの国に生れんと願うべきである。何故なれば、こうした諸々の聖者と共に暮すことができるからである。と。

——阿彌陀經より——



蓮華花咲く

— お盆とおせがき —

戸 松 学 瑛

ことしも又、お盆がやって来ました。昔なつかしいお盆サマが。魂棚の奥深く、まざまざと、いますか如く、仏ぼさつに送られて、うちの先祖の宿入りか、香煙るると立ちこめる魂棚の、み前に供えられた数々の、ご馳走を、ご先祖さまは、さぞやおいしく召し上って下さることでありましょう。数々の花々を、さぞや、うるわしとご覧下さることでしょう。そこはかとなく聞える太鼓の音、

盆はうれしや 先祖さまが
晴れて この世に逢いにくる

× × ×

娘、島田に 丈長つけて
親に見しよとて 厚化粧

盆踊りの可憐の唄声も、かすかに聞えてくるお盆のニコマ。

○ お盆とお彼岸の、かどかどだけではありますが、私の草庵へ、お詣りに来る老紳士があります。処も知らず、名もつげず、けいけんそのものの容子で、本堂の外側から、お賽銭を上げて手を合せ、念仏若干べんを唱えてからの或る時、訊ねる如く、答うる如く、アノ、つかんことをお聞ききいたしますが、仏さまや先祖さまに上げたお供え物を、すぐ下げて、たべてもそのものの味が落ちると言うことは本当ですか、いや本当でしょうね……。トッサの質問に、マゴツキ加げんの私の返事も待たず老紳士、実は和尚さん、私の母が私たち兄弟や妹が、まだ幼少の頃、それは信心深いやさしい母でしたが、その母が、どんなご馳走でも、お供え物でも、たとえばそれが下駄の包であっても、おはぎでも、ぼたもちであっても、必ずそのまま、仏さまに供えてからでなくては決してお許しが出ず、そして申さ

れるには、ノノサマは、きつと召し上りますよ、まちがいありません、その証拠に、上げてすぐおろして喰べてごらん、味が落ちて居りますよと、いつもいつも母が申して居りました。和尚さん、それは本当でしょうねと。本職の和尚さんにきいたら分るだろうと思ったのでしよう。この童話じみたお話に、久し振りで童心をゆり起されました。本当にお話の通りでありましょう。

蜂は蜜をとって花をいためず、ちょうちょうも花から花へ、しかも花を痛めず精を取る。お寺生活半世紀余、随分お供物を頂戴した私ではあるが、お供物の味の加減はとんと心得ず。老紳士の無邪気な自問自答ならぬお訊ねに雙手を挙げて賛成です。本当に供養は届くものです。誠ごころの一徹は必ず達するものであります。

○

筑前太宰府の天満宮の御社殿前に一本の老梅樹、立て札に曰く「飛梅」と、これはこれ千年の昔、罪なくして配所の月を眺めた菅公が、たまたま都に遺愛の梅が香をしのび、かの名高い「東風吹かば、匂おこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ」の歌一首を詠まれた。すると、不思議や忽ち、都の梅がここに飛んで来てさては……。非情に情あり、又精霊あり、以心伝心とでも申しましょうか。お

かしくも又哀れな社殿の風景であります。同社の宝物殿には数多くの国宝が秘められて居ります。菅公親筆の般若心経、観世音普門品等々、紺紙金泥の光を放って、まことに尊厳であります。それにも拘わらずこの可憐な飛び梅に心をひかれますのは単に旅心の気まぐれからでありましょうか。案ずるにこれ、人の心の誠が作用するものではありませんまいか。誠は天地を感動せしめ、鬼神を泣かしめる。過ぐる大戦に、父や子や夫や孫を大陸に送ったこれ等勇士の家族が、カゲ膳、カゲ水を供えて以て飢渴なからしめよと祈願した生々しい事実、それが届いたとやら届かぬとやら、詮議の筋は一切無用。目に見えぬ神の心に通うこそ、人の心の誠なりけれ、とは昔も今も変らぬ真証でありましょう。仏在世の貧の一灯、長者の万灯の物語もしのばれて有りがたいことであります。

○

人の心の誠とは？、言うは易くして行ふは難し、まことしやかな顔つきだから出来るものでなし、神妙な容子だから出来るものでなし。持って生れたそのままで、仏さまの御心になうようなお念仏、御指南通りのお念仏を申すこと、これが私たち凡夫持ち合せの誠ごころのあらわれと申してよろしい。

阿彌陀仏と言うより外は津の国の

難波のこともあしかりぬべし

と法然上人は御述懷遊ばされました。

虚仮（コケ）とて飾る心にて申す念仏が往生はせぬなり。決定往生せんと思はば、飾る心なくして誠の心にて申すべし

と沙汰あらせられ、又、心には助け給えと思ひ、口になむあみだぶと唱うるを三心具足の誠の念仏よと、上人はお教え下さいました。

八万四千、釈尊一代の御法門は畢竟浄土三部の經典に尽き、その三部經は、選撰本願念仏集に集約せられ、その選撰集は、一枚起請文に、その起請文は、とどのつまり南無阿彌陀仏に結着するとは法然上人の御判定であつて浄土開宗の御精神であります。私ども凡夫、念仏申すに何の不足がございましょうか。心には助け給えと思ひ、口になむあみだぶと申す外には別の仔細ないのが念仏門の奥の手であります。

○

寺々に尊いお施餓鬼の法要がつとまります。精霊棚に清き水、みそはぎ（溝萩）そなえて、灯籠下げて、殊に微妙の蔬菜を献じ、普ねく希有の香華をつらね……。

○ノウマクサラバー タターギヤタ パローキテイ ヨン

サンバラ サンバラ ウン。

○ヨン ソロー ソロー ハラソロ ハラソロ ソワカ。

○ノウマクサンマンド ボダナン バン。

○ナムアミダブツ ナムアミダブツ。

さあ、さあ、召し上れ、召し上れ

甘露の水を スル スル と

お慈悲の水を タント タント

万徳帰するお念仏で、しめくくってナムアミダ仏と少飲食を交じて充ち足らしめ、亡き人に、又諸の餓鬼衆に山海の妙味を供養して冥福をすすめるお施餓鬼の法要は世にも尊い、おつとめでございます。

茄子のお馬でトットとござれ、角の四つ辻、迷はずに：お施餓鬼の法門は、ただ現在を益するのみにあらずして、遠く未来に被らしめんとの大聖釈尊の大慈大悲、伝々相うけ相伝えて二千五百年、恭敬と供養の限りを尽して、印度支那、日本、三国伝来して盛に行はれて居ります。三界万靈もさぞ浮ばれることでありましょう。

開いた ひらいた 何の花がひらいた

蓮華の花がひらいた……

遠い昔の先祖方は、わらべ歌にまでうたつてお盆を、お施餓鬼を、お念仏の御功德を、今の世に伝えて居られます。

これあれ七夕

デラックスばやりの此頃、七夕祭も盛大になって来て、仙台、信州の各地では、市街目ぬきの大通りは、時ならぬ五彩のトソネルト、動かぬカーニバル・デコレーションに一変する。クリスマスにしても、花まつりにしても、盛大に行われることは結構だが、これが商業主義に利用されて、あらぬ方向へ逆転する気配も強い。

七夕は、牽牛星と織女星とが、銀河をはさんで、年に一回の会う瀬をたのしむ日。この日一滴でも雨が降ると、銀河の水があふれて、河を渡つて手を取り合うことが出来ないといわれる。まことに、夏の夜空を飾るには、美しくもものがなしいロマンの香り高い行事なのである。

大昔、何ごとにも今日のようにコセコセしない、おおどかな心の人々が住んでいたこ

ろ。夏の夜、涼を求めて大空の下をそぞろ歩く。そんな時、きつと、若い男女は腕をとり合つて、二人の逢う瀬の短かさをなげいたことであろう。何故、日々夜々、二人は一緒にいられないのかしら。人にかくれて、夜草のかげに、ほんのときたましか会い寄り得ないかなしみの心を持って、二人はちつと空をみる。大空にちりばめた星が一つ一つまたたいている。地上の、若い二人は何かささやいているように。そんな時、二人の心には、ゆくりなくも一つの物語りが湧き出でて来る。ヒコボシとヒメボシの年に一度の逢い引の夜のことが、お星様でも、男、女の仲は思いにまかせぬもの。まして、地上の私達が、思いの限りのつくせぬのは当り前。さあ、もう悲しむのはやめて、せめてこうして二人でいる、このひとときを心ゆたかに楽しもう。そして、次の時の来るまで、悲しみとうれいに耐えて、ひそやかに生きて行こう。

こうした、恋情の機微の漂う七夕祭は、それだから、若い人々、ことに、恋になやむ男女のための祭りでこそあろう。これが

転じて、少女の技芸の上達を祈りねがうことにもなり、中国から、日本の奈良朝の頃すでに欠かせぬ年中行事の一つとなつたのである。

芋の葉にたまつた、水晶のような水滴を硯にうけて、これで墨をすって字を書く。短冊に歌をしたためる。ささ竹に、五彩の紙を飾つてこれに吊るす。そこには、何の邪気も、邪念もない、ただ、素直おに星に祈る心の美しさだけが輝いている。

七月という月は行事の多い月である。七夕を皮切りに、ほおづき市、草市、お盆、中元、施餓鬼、やぶ入り、おえんまさま等等。子供の頃、白がすりの単衣を短か目に着て、兵児帯をお尻にさげて、夕ぐれの町角を、次々とお祭や縁日を追って歩いた思い出がなつかしい。

しかし、現実には、今日もまた、町にはたくましい商魂が、いたづらに七夕の竹の高さをきそっている。

(N生)

◇ ◇ ◇



お経オンパレード

— お盆随想 —

伊 藤 辰 造

今年も又といつては妙に聞えるかも知れませんが、とにかく今月はお盆を迎える訳です。で、私のこの「又」ですが、これは別に悪気じゃないので、詰まるどころ、幼い頃の思い出を無意識に連想しての親しみとか、懐かしさといったものがそう言わせるものらしいです。

近頃の東京では、昔の、とりわけ下町のように家内中が揃って、軒並、掃き清められた門口にで、お迎え火を焚いたりなどする情景は、あまり見かけることが出来なくなつて終いましたが、どうもチョッと淋しい気もするし、それに又、新興宗教や既成教団のことで様々に論議されている当節、こうした「しきたり」とか仏教の行事、それにお寺さんの在り方などの移り変わりや姿を見ると、やはりこれは論議以前の現実の問題

として、いろいろと考えさせられます。

ところで、肩のこりそうな話題はいづれのことにして先づ、アレコレと思い出したことを行き当たりばったりに幾つか列べて見ることにします。

私達の子供の時分は、今でこそ唄などで時おり耳にする位が関の山の、例の

「鐘は上野か浅草か……」。で名高い寛永寺と浅草寺の鐘の音が、丁度ぶつかり合う寺町の真ン中で朝に晩に、両方の音を聞きながら育つたものですが、迎え盆の夕方など、軒先にそろそろ涼風すずかぜが訪れる頃ともなると、どこの家でも「お迎火」を焚いて御精霊様を迎える。そうして、災難をよけたり持病が快くなるようにと、家族のもの皆んなが炎にかざした手でそれ



その個所を撫でたり、次々にその残り火をまたいだりする。子供達はただ訳もなく面白がって跳び越えとびこえ、中々止めそうもないし、年寄連は、これも、中氣のオマジナイとかいって、愛用の煙管^{きせる}へ煙草を詰め、その火で一服つけるといった按配。

私などは、今から見ると大分に小さかった小学生の中でも一段と小粒で、ビリから三番目位のチビ助だったもんですから、こんな時に往来で遊んでいれば「僕ンチの仏様とおんなじかな」などと、好奇心に馳られて、近所の家の中を簾の下からよく覗いて見たもので、ヤッパリ同じ様なもので、御定法通り、茄子や胡瓜の馬共が、木箸の脚をフン張って精霊棚の上に納まりかえり、供えてある御馳走を横目でニラんででもいるようです。

そして、岐阜提灯や盆灯籠がユラユラと風に揺られている辺りを、仏様のお線香と、焼物で作ったブーチャンの——と言ってもアノ市村君のじゃないんですよ——口から出てくる煙とが仲よく流れる向うでは、親爺さんが片肌ぬぎで、浴衣の襟から団扇の風を送りながら、好きな一杯をやっているらしく、元気な笑い声が表の方まで飛んでくる。

どこかでトウモロコシを焼いていると見えて、素朴な香りが、芳しく鼻を突いて私の味覚をくすぐる。

と、突然に我が腕白グループの錚々^{そうそう}たるメンバーである所の、誰彼チャンのとても無邪気な、そして如何にも嬉し相なハシヤギ声が風に乗ってきて耳元をかすめ、今度は私の足を無茶苦茶に我が家に向けて走らせてしまう。

これは或る日の、それも時間にすればホンの僅かな夕方の一ト鮎ですけれ共、こんな具合に、その他様々なことが、来春には年の方だけ人間並の還暦になろうという今の私に、まるで昨日の事のように次々と果てしもなく思い出されてくるのも、どうやら、子供心へ何の無理もない自然さで刻み込まれたものの「しわざ」に違いないように思われます。

前にも触れましたように、寺町にある家で、物心がつく頃から三十何年を過ごした関係で、鼻タレ時分からの、ツマリ少年期の最も親しかった友人の半数以上がお寺さんの俵たちで、しかもその殆んどが、行くゆくは住職になろうという連中。宗旨からすれば、場所柄だけにそのあらましがお東と言われるところの浄土



真宗で（門外漢の私から言わせると——但し感じの上から——ただ真宗とならばうなづけるが「浄土真宗」となると「真」は、「新」とする方が本当ではないかと思われる。けれどもこれは余談）その外、新義真言宗の智山派・日蓮宗・曹洞宗などがあり、ついでに在家の側の商売を列べてみると、呉服屋・酒屋・米屋、それに薬種屋にお医者さんから仏具屋といった調子で、何ソのことはない、生れるから死んだ先までの生活がザッと間に合う形になっていますが、中々そんなわけにも行きません。

私の両親、特に母親にいたっては、非常にこの友達を大事にしてくれましたから、始終、私の家へ全員が集まるわけで、そんな時はちょっとした仏教連合会みたようです。それもその筈で、在家の倅どもだって環境が環境ですから、その雰囲気は自然と身についていて別に継子扱いにもなりません。

それで何をやって楽しむかという、たまには真面目くさった顔で信仰心のことなど、子供は子供なりに又ニキビ華やかな頃になればそれなりに（下手な本物よりは余っぽど真剣）結構時間のたつこともありました、マア大体世間なみに、面白おかしくやってまし

た。しかし、少しは変わっていたところもないわけじゃありません。

今頃のような盆まえの夏の夜などに、ワザワザ二階の窓を全部たて切ったあげく、カーテンが足りなくて大きな木綿風呂敷まで引っ張り出して吊し廻り、やがて電灯を消して真っ暗にする。一体何をやらかすと思いますか、……「お化けごっこ」なんですヨ、……いま考えてみても無邪気を通り越して全くあきれたものです。下の部屋にいる者やお客様のことなんぞテンでお構いなく、ガタンピシャン、ドタンバタバタ、終いの果てはドタドタドタ。まるで地震と雷さまがタバで押しかけたような有様ですから、下にいる親爺などテソキリ顔負けの態たらく。こんなときは、流石の母親もかなり閉口したようでした。

その後、その母が死にましたとき、お通夜にこの一統が総動員で一ト晩中、それぞれ得意のヤツを交替に一トくさり、モウ、お互いが三十面（うら）になってましたんで、相当にイタダけたものでしたから、トント震災記念堂ソコノケの読経オンパレードで、先年亡くなられた菩提寺の老和尚なども

「オイ、アリヤなにかい、皆んなお前の友達かい、



……中々うまいもんだナ」

と感心されていたもんでした。時がときだったにしても、そのときほど友達の有難サを感じたことはなかったように思っています。

そんな訳で、格別に関心を持って、いわゆる「今日の仏教」なるものに馴染んだことはなかったんですが——尤も十八歳の頃からは少しばかり思うことがあって、禅関係の書物を好んで読むようにはなりましたが——そうした環境や、まことに信心深かった母親の感化を、いつとはなく享けていた為でしょうか、今では、教義だのなんだのといった厄介な理屈は又キにして、神仏のことについて何がなく、多少は関心が持てるようになっていっているらしいです。

ですから、自分のことだけから考え合せてみてサエそうなんですから、何事につけても、幼ない時代の家庭は無論のこと、村なり町なり、ことに都会などの環境や友達の善し悪しがその人の生涯に、トテモじゃない大きく影響するということを深く感じさせられるわけです。

いま盛んに火花を散らしている例の「勤務評定」の

ことにした所が、いわばドッチもドッチで、早い話が「生きている」「先生」と、「活きている」「政治」とが、「生きている」「子供達」を、親御さん達から大切に預って「智・体」ともに立派に育て上げなければならぬという、肝腎の土台のことを、ドウヤラ忘れていいるのじゃないかしらと、どうしても見受けられます。

なんと言っても、先生方は子供達の身じかで天職を担当されるだけに、これも「理屈」又キに考えて貰いたいというのが、大方の父兄が望む所でしょう。じゃないでしょうか。

まア余り、喰うの喰えないの、出来ることの出来ないことのと（そんな事はナニも学校の先生ばかりじゃない、ヨンドのことなら商売がえしたらと言いたくもなる）やり合ってばかりいないで、たまには「心」の方にもチットは何かご馳走してみたらドンナもんだらうか。お念仏だってやって御覧なさい、中々有りがたい調味料ですよ。——お念仏と調味料を一しよにしたからってお坊さん方、怒らんで下さい——「塩配」とも書かれる位に、料理にとってはなくてはならない大切



なもので、その割に、塩の有難味を存外しらないんじゃないですか。こればかりは生身なまみの命の最後の「綱」だということをやウツカリ忘れていて。……念仏だって坐禅だってみんな同ンなじこってすよ。

手前味噌を辛らくするなんぞという不屈きな意見は毛頭ありませんけれども、仮にどこぞへお詣りでもしたときなどは、日ごろにイヤでも溜まった心のカスが一ツペンにフッ飛んでしまい、実にサバサバとしてよい気持ちですよ。まったく。

おいおいと年を重ねるほどに菩提寺へも足しげくなり、最近とくに目につくことは、ココ二三年来、お盆やお施餓鬼、お彼岸などの年中行事に、若い人達のお参りが段々と増えてきたことです。結構なことですねエ。

中でも微笑ましいのは、余程の差しつかえでもない限り、これ等の行事に欠かさず、一家こぞって見える檀家が何軒かあることで、その人達の様子を見ると、どの家の人も申し合せたように本当に明朗で、和気霽々として帰って行かれる。余計なお節介みたようですが、こういう家庭の息子さんや娘さんは心柄もよからうし、例えば縁談の世話をしたからって、こちら

が恥をかくことなどは恐らくあるまいと、いつもツクツクうらやましく思っています。

さしづめ私共から早速にもと思いながら（いろいろと事情もあって）いまだに実行しかねていますが、出来ることなら、日本中の人が皆、そうなってくれればと、夢みたようなことですが、時々そんなことを考えてみることもあります。

前後しましたが、今月はまた七夕祭りの月でもあって、お星様のことも話題の一つです。すっかり晴れ上った夏の夜空を、縁台でも出して長ながとおおむけになって見てごらんなさい。果てしもない紺碧の中に、キラキラと無数に散らばっている星をジッと見つめてみると、終いには、一切の雑念が消えうせて、あとは只、廣大無辺があるばかり。

これも又「念仏する心」の、別のかたちでの大きな「糧」ともなると思います。

浄土歌壇

岩野喜久代選



天

富山 関 理一

春の灯や歌を論ずるその相手駅に下車して打ちし終止符

評 春の夜の郊外電車か何かで

あろう。歌論を闘わせていた相手が、あわてて降りて論戦の幕が下りてしまった。あとには快よき昂奮とほどよき疲れがある。のどかな春宵であることは、初句、春の灯やで表わされている。

地

東京 青山 なを

老父老母みなひそみをりさはやかに言葉つかふは役人らのみ

評 いたましい胸打つ光景である。未帰還兵の老いし父母たち、戦後十三年未だ生死の確認されぬ愛児の上に思いを

はせ、役人たちに事情をきくにも、首をうなだれ深い憂色に包まれている。そう云う個々のいたましい心情に慣れた役人達は、無感動に弁舌さわやかに、生死不明の足跡の説明をするのを作者は憎しみを

覚えてつづきいている。

人

東京 麻見和世

さくら散るにはかに空の明るくて昔のとほく思はるること

評 さくらには、子供の時から

の数々の思い出がまつわる。作者は、空を白くしてちるさくらを眺めている中に、遠くなつかしい昔を思い出してやさしくやわらかい心地になった。うまい歌である。

東京 久地楽直絲

涸れはててあらはに白き川底を小川のごとく鳴れるひとすじ

神奈川 中里史子

生垣のかなめの紅が柔かく光れる朝は憤り耐ゆ

東京 星野千代

春おそき谷川の村白妙のさくらには疎林の日だまりに咲く

神奈川 松原昌二

大地いまほのむらさきに炎えんとす金環食の極はまれる刻

東京 二宮綾子

封じたる苔のごとく陽に咲きて峰々光る十国平

熊本 阿部キヨ

三日月の形に欠けし太陽は我の生命に似たる心地す

東京 紫藤よね子

語りしをうしろの庭に聴き居りしリラの小花よ継ぎて語らむ

大阪 山村綾子

ゆふぐれの桜つかれてゆるやかにありとしもなき風にもちる庭

愛知 堀江真鯉夫

夕焼の茜の空を帰りゆく今日の鴉はことに真黒し

島根 吉田弘道

女みて堂に経あぐ春殖寺われ水取りの浄き井を酌む

東京 山田清子

夏柑子山吹黄なりゆたかにも窓くもれども光かざして

東京 渡川敬子

嫁ぐ日の近きを語る友の顔喜び満ちて美しく見ゆ

福岡 吉末真竜

嫁ぎゆく友見送りて門に立つ心にはかに寂しくなりぬ

静岡 洗醜隠人

横はる巖に野ばらの花盛り溪川の水手弱女の泣む

岐阜 川田茂生

血縁はうれしかりけり釈尊も大樹の蔭は涼しと宣らしき

山形 佐藤諦叙

春の旅村を行きつつ道とへば同時にうごく田植笠かな

東京 平川梅路

蠟の灯の消ゆる真際の明るさとわれみづからは思へるものを

福岡 徳永真言

我が国の何処の隅も悲しきは失対人夫あまたあること

福島 朝日蝶子

信夫野のりんご畑のここかしこ人忙しげに白き花つむ

鹿児島 長崎恒子

数ふれば二十五度目の屋越しにて位牌となりし母をともなふ

神奈川 熊坂満

犬愛でて犬に目鼻の似る人も来れる犬の品さだめかな

鹿児島 児島登喜子

子らふたり学ぶ都と鹿児島距離いま少し近かれと思ふ

神奈川 張山はるみ

背丈伸び腕たくましく少年が脳細胞は石と化しぬる

和歌山 中川誠一

城山に南洲に似るアナウンサーつぶさに語るその南洲を

東京 川辺つぎ子

轢入れて障物物こす若人と馬を桜は吹雪して巻く

鹿児島 串岡君江

白牡丹匂ふが如く仄くらきみ車の内に笑ます皇后

青森 向井きつ

赤き花一つ落して客去りぬ我はひろひて押花にせる

高岡 八島美雄

山あひに今をさかりと咲き誇る能登路に映ゆる桜と海と

庶民と念仏

—死ということ—



一 瀬 直 行

前回では、私の生いたちを申し上げましたが、本日は人間の死ということについて話してみたいと思います。死を語ることは、生をも語ることにになると、私は考えております。

私は今日までに、幾人かの肉身とわかれて来ました。父親を早くになくし、母親を疎開先きでなくしています。又嫁いだ妹ともわかれていきます。そして私の末の子を三歳にまで育てて、とられています。人の死

に区別はありませんが、子供をなくした悲しみは、親にとって終生忘れることが出来ません。母といい、妹といい、末の子といい、いずれも戦後間もなく、きわめて不自由な時代にとられています。

本日は父の臨終の時の思い出について、少しく語ってみたいと思います。

それにつけても、今日この頃は、なんと死を軽くみ、軽くあつかわれていることでしょうか。浅薄な時代の姿を裏がきして、情無いことと思います。いったい死の厳肅さ死の尊厳ということとは、どこへいつてしまったのでしょうか。殊に戦後の若い人達の間には、そうした傾向を一層強く感じます。

あの戦争中の無慈悲をきわめた残虐さをみて、人間の生命を軽んじるようになったのでしょうか。おそろしい話です。

ちょっとした争いにも、直ぐ刃物ざんまいに及んで、相手の生命を簡単に奪ってしまふ。そうかと思うと、それ程重大な理由があるとも思われないのに、若い人は死を選んで、自ら大切な生命をたってしまう。毎日の新聞紙上をみれば、あきらかなことです。

そうした悪い影響は、色々な点からうけていますが、愚にもつかない映画とか、小説なぞから相当大きな影響をうけているようです。つまらないものをつくっていれば

沢山のお客が、自然と集って来る。つまり金が儲かるから、又製作するといふこの悪循環は、いつまで続くのでしょうか。そんなものは、も早や馬鹿馬鹿しくて、とてもみていられない、又読みたくもないと、よりつかなくなれば、自然と製作者の方だってやめてしまうでしょう。そうした高められた時代は、いつになったら来るのか。ただ世の中のならゆきにまかせておかないで、どうしても高められたものにしなければ、いけないと、痛切に思います。

殊に子供の世界では、影響された悪いことが、

直ぐまねられ、直ぐひろがってゆきます。子供達には、単に遊びであっても、ほんものに近ければ近い程面白がり、危険であれ



ばある程、興味をよび、熱中しています。土地柄といいますが、かけごとが盛んですし、殺伐な遊びも盛んです。

いつも私は死ということを、傍へひきよせて、じっとみつめています。かた時といえども自分の死を強く感じてい、忘れないようにつとめております。どうかして早く死んでしまいたいなぞと、勝手な考えをおこすことがあります。死というものは、そんな安易なことではなく、もったきびしいものだと思って、反省しております。又どうかして、いつまでもなが生きしたいなぞと、勝手な考えをおこすことがあります。死というものは、死というものは、そんな安易なことではなく、もったきびしいものだと思って、反省しております。

私にとって、死ということは、生の充実を意味しております。死ぬことを思うことは、その儘生きることを思うことになりました。死といえ、直接生ということにはね返って来ます。死をそんざいにあつかえないというのも、生きること自体が、最も人間にとって大切な事からであるからといえます。

私一人が生きてゆくことなんか、そうたいた問題でなく、従って私が死ぬることだって、そうたいしたことではない。成程

私が私だけにとどまっています限りは、それでも、よいかもしれません、矢張万人に通じ合うものと、考えないではいられません。

それに私一人の存在なんて、あり得る筈もなく、誰でもが、お互同志連関し合つて、世の中はなり立っているものと、思います。私は私一人の生であり、死であるなぞと、そんな思いあがった考え方は、私に出来ません。又そんな淋しい考え方には、たえられません。

あの男は自分勝手な生涯を送つて、随分人に迷惑をかけていったが、とうとう死んでしまった。まるで迷惑のかけっぱなしであるが、死んでしまえば、それまでのことで、今更死者に対し、とかくのことはいえない。こうした寛大さは正しいと思うし、美しいとも思います、だが、人間の最後、つまり死が、そんな方便に使われてよいものでしょうか。立派な生涯があつてこそ、立派な死もあると、思います。

私は自分の心がゆるんだり、或はたるん

だりした時、ぐっと死を手元へ引きよせ、教えとも、はげみともしています。そうした時に限らず、なにか心に危険を感じた時、いやに調子付いて、うわついた時、ともあれ、軌道からはずれそうになった時、死を呼びよせ、心の上にあてがっていきます。

私は死をみつめるばかりでなく、側からはなさないようにしています。死を小さな箱の中に入れておき、机の上とか、寝る時には枕元とか、外へ行く時にはポケットにしのばせておくとかしています。

それでもどうかして忘れやしないかと思ひ、私の心である肉体の上に、じかに死と書いておきます。そうすれば心の大きな安心を得ます。

私のいう死とは、念仏にも通じております。いや念仏そのものであるともいえません。

前回で私の父は若くして死んだと、申しましたが、今日でいえば四十六の時に、萎縮腎でなくなっております。当時として、

手のつくせるだけはいくらもありません。

然しいよいよいけないとなつて、当の父も覚悟していましたし、家族のものもあきらめざるを得ませんでした。

最後の一夜となりました時には、私も側につきっきりで、看護につとめました。特に高熱にうなされてゐるわけではなし、苦しみを訴えるわけでもありません。ただ身体中がだるいといわれる儘、静かに腰や足を撫でていました。

父は時たま尿を訴えますので、私は尿瓶をあてがい、とりました。その時、冷たい瓶が段々とあたたかくなつてゆくのが、今でも私の掌に生きて、残っております。

父の臨終を思い出すたびに、このあたたかみが甦つて来ます。既に死期の近付いたことを知り、母は隣りの部屋で書類を整理していました。その時が、父の最後となつたわけです。

私は父の生前中からお経をよむことを教えられ、病床についてからは、私が父にかわつて本堂に出ていました。

いよいよ最後が来たという時、父は私を側へ呼びよせ、お経をあげろといい付けました。その時なんのお経をよんだか、忘れましたが、いずれ簡単なものです。父も目をとじ、口の中で静かにお経をあげていきます。父の意識は死ぬまで、はっきりしていました。私はなんともやりきれない気持ちでいましたが、いい付けられる儘、お経をよみ念仏をとなえていました。

ふとその時、今の今まで口の中となえていた父の念仏が、とぎれたかと思うと、目蓋から涙があふれ、病み疲れた頬につたわって来ました。

遂にそれが、父の最後となったわけですね。ときどき私は父の最後の涙を思い浮かべては、矢張死にたくはなかったのだと、思いました。それも当然なことです。四十六の若さで、然かも父は実地的な活動家でしたので、あれこれと色々な計画を立てて、それもどうやら順調にはこび、軌道にのり始めると、すべては挫折したのです。その上に私をかしらとして、未が三つにな

ったばかりの五人の子もちです。そうした子供たちをあとに残して、ひとり死んでゆくとすれば、この世に未練の残るのも当然なことといえます。

そうした父の最後の気持ちを、私はよく理解しながらも、何故あの時、父は涙を流したのか。もっと念仏生活に徹してはくれなかったのかと、そのことが心から今でも来ます。

ところが、いつか私も父の死んだ時と同じ年の四十六を迎えるようになって、父の涙がわかって来ました。私は既に父より今日十年近く、なが生きしています。あの時なまじっかさとりすましたような往生を上げてくれなかったことが、人間本来の姿をいわば真実を教え、残していつてくれたように思われ、安心を得ました。成程あの時頬をつたわって涙こそ流したが、口には念仏をとなえています。この矛盾と最後までたたかった父の姿こそ、そこに法然上人の教えがひそんでいるのではないかと思っております。(NHK「人生読本」より)

信

至りて堅きは石なり。

至りて軟やわらかきは水なり。

水よく石をうがつ。

心源もし徹しなば菩提の覚道何事か成らざらんと言えり古き詞あり。

如何に不信なりとも

聴聞に心を入れ申さば

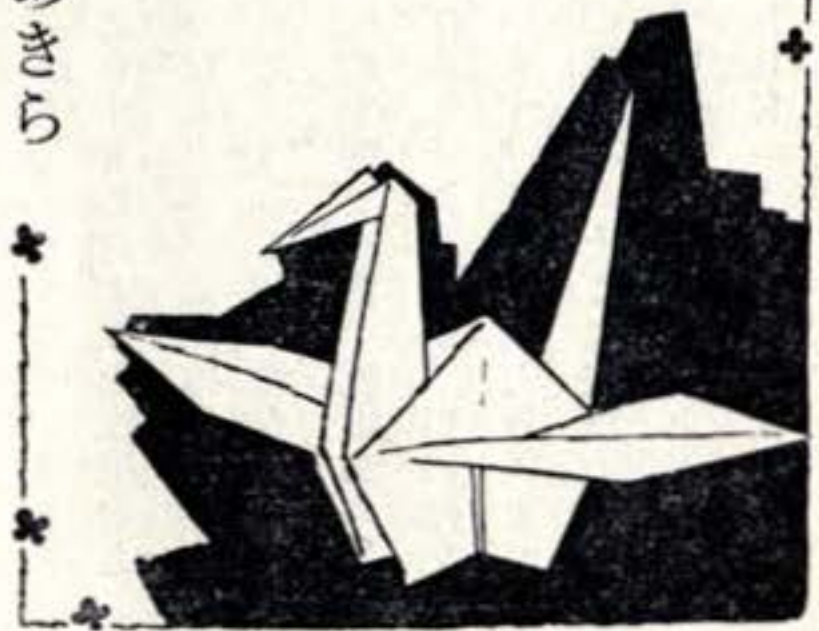
御慈悲にて候間

信を得べきなり

蓮 如

おりづる

童話



きりぶち あきら

まっ白なカーテンが、ときどき思い出したようにゆれます。そのたびに、まどのそとの木の葉がチララ、チララと、カーテンにかけをうつします。

民子は、じっとミルク色の電灯のかさを見ていました。

さっき診察にきた院長先生が、聴診器を耳からはずすと、
「ほう。民子ちゃん。だいぶよくなつたね。」
と、いつてから、急にまゆの間にギュッと、しわをよせて、
「だけどね。いいかい。だけどだよ。この病

気は、ゆだん大敵で火がボーボーになるんだよ。よくわかつているね。じゃあ、おだいじに。」

二・三度、民子の赤いおかつばをなでると、かんごふさんといつしよに、このへやを出ていきました。

つきそいのおかあさんも、せんたくものをかかえて、たった今、洗面所へいつてしまいい、ただベットののはじのおき時計の音だけが、タッタタッタと、民子のむねにひびいてくるだけでした。

（だけどね。この病気は、ゆだん大敵なんだ

よ。）

院長先生ののこしていった言葉を、もう一度口のなかでつぶやくと、民子は顔を横にむけました。

へやのすみのかびんには、色とりどりの花が、あふれるように、いけてありましたが、おかあさんが捨てわすれたのでしょうか、白いダリアの花がひとつ。茶色く枯れたまま、さしてありました。

（だけどね。この病気は。）

民子は、右手をのぼすと、おみまいにもらったヌガーを、人さしゆびと中ゆびで、つまみました。

きれいなつつみ紙をむいて、ヌガーを口にいれると、ただそれだけで、両方のあごがいたくなるようなチョコレートのおまさが、口いっぱいひろがりました。

民子は、青い線のういてみえる、すき通るような白い手の中に、つつみ紙をまるめましたが、また、手をゆるめると、てのひらの上につつま紙を乗せて、ていねいに、しわをのばしてひろげました。

青と赤のきれいなヌガーの つつま紙。お

いいヌガーの きもの。

「つるを おってみようかしら。」

まくらをすこし高くすると、民子は、つみ紙でじょうずに、つるをおりました。

ふつうの色紙の半分、いえ、四半分ほどのかわいい おりづるが、手の中で生まれました。

「かわいい つる。かわいい つる。」

できあがった小さなつるを、民子はほそいゆびでつまむと、さも飛んでいるかのよう

に、自分の頭の上で動かしました。

右に左におりづるは、ゆびの動きのままに飛びまわっています。

すると、民子の目は、ぼうっと、虹がかかったようにかすんできて、おりづるが見えなくなっていました。

民子が、目をまばたいて見ると……。

おりづるは、十も二十も、百羽も二百羽もの数になって、白いカーテンをこえて、まどのそとへ、そとへと飛んでいきます。

さんのおりづるにまじって、雲ひとつない大空を飛んでいるのでした。

右を見ても、左を見ても、小さな おりづるの行列。みんな、とがたくちばしをしつかと前にむけて、わき目もふらずに、さも

気持よさそうに、ゆっさゆっさと飛んでいます。

下を見ると、ヒアシンス、チューリップ、グラジオラス、ひまわり、カンナなどの花と

いう花が、赤に、むらさきに、黄色にと、うつくしい花園が、どこまでも続いています。

「まあ、なんてきれい。どこまでも、どこまでも、あたし、飛んでいきたい。」

民子は、両手をつるのように、ゆっさゆっさと動かして、さけびました。

どのくらい時間がたち、どのくらい飛んだことでしょう。

花園のむこうに、黒ぐろとした山が見えてきました。

もならんで立っています。

羽を、手を、一かい動かすたびに、だんだんと山に近づいていきます。そればかりか、

近づけば近づくほど、その山やまは背のびをするように、ニョキニョキと高くなっていくのでした。そして、高くなりながら、

（だけど、だけど、この病気は。）

と、院長先生に似た、ふとい声がします。

「ぶつかるわ。ぶつかるわ。」

今までの晴れ晴れとしていた民子の胸は、ドキドキと大きく鳴っていました。

山の赤いはだが、はっきりと見え、ひとつひとつの石ころまでがわかります。

「ぶつかる、ぶつかる。」

民子は、おそろしさに手を動かすこともわすれ、頭をひくくさげたまま、じっと目をつむりました。

どこへいったのか、おりづるのすがたは、もうどこにも見えません。

山と山の間から、

（だけどね。この病気は、ゆだん大敵だよ。）
という院長先生のふとい声が、また、きこえたような気がしました。

「こわいわ。おかあさん。民子、とってもこわいわ。」

民子は、体をこまかくふるわせました。

その時、花園をかきわけけるザッザッザッ……という音がして、どんよりにごった沼が、民子の下にあらわれました。

「あー。」

民子の頭の中に、小さなうずまきもようのこまが、いくつもはいつてきて、だんだんとそれらが、はやくはやく、まわりはじめました。

沼は、いつとはなしに、ゆらゆらとゆれはじめ、すりガラスのようなもやが、ぐんぐんとあたりをつつみはじめました。沼のまわりの花は、もやの流れにつれて茶色く枯れていきます。山も見えません。

もやは、じわじわと空へものぼってきて、民子をつつみました。そして、民子の体は、まっさかさまに、ものすごい速さで、下へ下へと落ちていきます。

「落ちる。落ちる。落ちていくー。」

民子のさけび声も、声にはならず、のどのおくふかくで、せきとめられました。

仏教ものしり帖

弁天さま

くわしくは大弁功德天、大弁天、略して弁天ともいう。江の島の弁天、上野不忍の池の弁天など著名である。別名に美音天、妙天音楽などといわれ、七福神の中の唯一人の女性神として人気がある。原名は梵語でサラスバチーといって、これはインドの大河インダスの支流の名である。大昔のインドの風習として、色々の願い事をする時には諸天神に祈願するのだが、このサラスバチー河のほとりへ行つて歌を唱うと、どんな悪声の者でも、美しい玉をころがすような声にして下れると信じられ、やがてその信仰がひろまって、此川を神として、弁舌や美声、音楽の神とあがめるようになった。後に、仏教の中にとり入れられて智慧弁舌の弁才天となったのである。

ところが、別名の中に弁財天というのがあって、この方が一般の信仰にうけ入れられた。弁才天の方は智慧、弁舌、音楽の神であつたのが、弁財天となると、財宝を施す福の神として信仰された。これは弁才天と吉祥天とがいつの間にか一つのものになったのであるが、現在でも、弁天様は水商売の婦人達に、その美貌と美音の故に崇拜されると同時に、福の神、財神として矢張り商業人との信仰が篤い。先に挙げた江の島に、びわ湖竹生島と厳島の二つを加えて三弁天の名でも有名である。形像はすべて女形である。普通は白顔玉の如き美貌に、ふくよかな肉線を持ち、頭宝に冠を戴き、青色の素衣をゆるやかに着し、左手に琵琶を抱き、右手にこれを弾いている半伽像が多い。江の島の弁天は裸形であるので有名である。時には立像で八臂（腕が八本）に種々の器具を持つものもある。

ツツツツツツツ——

て、沼も、なにかも夢のようにきえてしまつて、あたりは広い広い青草原。

民子は重いまぶたを、むりにあけました。おりづるも、花園も、山も、もやも、そしでした。そこに民子は、ただ一人ですわっているの

民子は、じーと自分の手を見つめました。
カーテンの白さににた、紙のような手。

「これが民子の。」

民子はいそいで、その手で顔をかくしました。
た。

火のように顔だけがカッカとほてって、手がよけいづめたく思われ、あわてて顔から手をはなしました。

肩でハーハーといきをしながらも、民子はまっ黒にくもった空を見あげました。

「だれかー。だれかー。ああー。おかあさーん。」

なんの音もきこえない、いきぐるしいような、ひとりぼっち。

すると、かさなりあった雲と雲のあいだに、コバルト色の青空が、スーと見えてきました。そして、その青い空のなかに、白いつるが一羽。羽を大きくひろげて、民子のほうへ飛んでくるかのように思われました。

「ああ。つる。つる——。」

民子は、つめたい手をかたくにぎりしめて、目を見ひらきました。

「あの白いつるが、あたしをたすけてくれ

る。見うしなっではいけないわ。しっかり目をあけて、見ていなくては。」

しかし、白いつるは、かべにはりつけた紙人形のように、びたりと空にくっついて、すこしも近づいてきそうもありません。

かたほうの羽の先に赤、もうかたほうの羽の先に青いランプをともしているように見える、ふしぎなつる。

「つーるー。はやく、はやく、きてー。」

民子は、力いっぱいよんでみましたが、民子と同じ顔をした、もうひとりの民子が、（だけどね。この病気は。だけどねー。この病気は。だけどねー。だけどねー。）

と、どこかで楽しそうに言っている声に、けされてしまいました。

「はやく、はやく。」

民子は、いらいらして、足をバタバタと動かししました。いえ、動かしははずの足は、しつかと大地にくいこんでいました。

民子は、広い青草原の中で、白いダリアの花になっていたのですが、民子はまだ、それに気がつきません。

赤と青のランプを、ピカッ、ピカッと光ら

せたつる。その顔は、やさしい、ほとけさまにきてきて、

（ここまで、自分の足で歩いておいで。一步。あせらず、あわてず、自分の足で。）と、しずかにいったようでしたが、

「つーるー。はやくきてー。おねがいー。」という、民子の声と、そして、民子と同じ顔をした、もうひとりの民子の、

（だけどねー。この病気は。だけどねー。）と、いう声とがいっしょになり、三つの声はかさなりあって、白いダリアになった民子の足もとに、落ちていきました。

ちょうど半分だけ、茶色くなったように見える民子の足もと。白いダリアの根もとに。しかし、びたりと空にくっついていて、白いつるは、そのころは、もう、つまらないぬけがら。

白いつるの心は、だれにも見えないすがた——ほとけさま——になって、民子の白いダリアの根もとに、一つぶ、二つぶ。あまいつゆをそそいでいらっしやいました。

（おわり）

比叡のみ山黒谷を訪ねて

大橋 俊雄



黒谷文珠塔

まどろかに起伏する東山のはてる所に、大の字のくつきり浮ぶ如意ヶ岳があり、その北につづいて歴史にあまねくひびく比叡山があ

て、比叡山、延暦寺はまた鎮護国家玉体安穩のみに山をぞいふ」(拾玉集)と詠まれているように、山といえは京都では比叡山を指すに

る。この山はけわしく聳えている中にも、山ひだの曲線が美しいので「都の不二」として、京の人々に親しまれ、「世の中に山てふ山は多かれど、山とは比叡を祈る神聖な道場として朝廷の尊信を集めていた。延暦四年(七八五)伝教大師最澄がこの山を開いてからというもののこの山に学問を究め、信仰を培うために訪づれる人も多く、一時は三千坊もの御坊が一山の中に建られていたということであり、今でも、とある山かげに石垣を残しているのは在りし日の殿堂の存在を物語るものであろう。鎌倉期に出て一宗の開祖と仰がれる法然上人も親鸞も、そして日蓮や道元でさえもこの山で修学をつまれた人達であった。比叡に一度は登らなければならぬ。これは私の前々から懐いていた心

境であつたが、急がしい旅をし続けている者にとつては、山に立寄ることすら容易ではない。最初此処を訪づれたのは去る二十七年の秋のこと、翌年夏には石井博士と麓の坂本西教寺に「金剛宝戒釈義章」を校合に行き、早ければ横川から黒谷まで足を延ばしたいと思つていたのに、案外校合に手間どつて、浄土の芳燭を慕ふことは出来なかつた。それが第三回教会大会という聖なる催しを機会に小沢先生や戸松、梶村の両学兄とつれだち、西塔黒谷を訪ねることが出来たのは何よりの幸せであつた。

高野川と加茂川の出合に近い出町柳から京福電車で八瀬に、更にケーブルで四明ヶ嶽に至る頃から、今朝はよく晴れていたのに、急に天気もあやしくなり、山を下る頃から遂に雨に変わった。山王院で雨待ちした一行は、晴れるのを待つて阿弥陀堂から戒壇院を経、大講堂にたたずみたりし日の面影を偲び、宿院に至り精進料理に舌ずみして、又もと来た道を山王院にと急いだ。山王院は曾つて智証大師が天台座主のみぎりの住坊と伝えられている。ここから道は右折し、だらだら坂の石畳

を下ると正面に浄土院の唐門が見える。ここには「心形久しく勞して一生ここに窮まる」と悲痛な言葉を残し、法を慈覚大師円仁に付してなくなられた最澄の御廟所がある。何時か服部清道博士と行を共にして、下野薬師寺の戒壇を調べに行った時、偶々叡山の話が出て「浄土宗では宗祖の御墓所をゴビヨウというらしいが、伝教の場合にはミミヨウというならわしになっているのだよ」といわれ、「そこには今でも山家学生式に規定された通り、十二カ年の籠山を誓い下山を望まない律僧が、生ける大師にかしづくように御廟に奉仕している」と話された事などが断片的に思い出される。そして墓石は異型の板碑様式だといわれたけれども、行を急ぐため境内に生える青々とした叡山苔に一瞥をあたえて、それを拝することもせず、細い杉木立の間をぬけて親鸞聖人が在山の砌り修学したといわれる無量院を左に、聖徳太子が堂を建て、そのそばに椿の杖を立てたところ、枝が出、葉が生えて何時しか繁茂するに至つたという伝承をもつ椿堂を右にして行く頃は、案じられた空模様も何時しか上つて木立ちの間からは青

空さえ見せていた。二内堂といわれる常行堂と法華堂をつなぐ廊下をくぐれば、つちの音も高く釈迦堂解体修理の現場があり、「黒谷みち」の指標に導かれて、歩みを黒谷にと進める。やつと一人位しか通ることの出来ないであろう露のある細い峰道をどの位行つたであらうか。何時までたつても、行けども行けども黒谷の片影さえ見えない。叡山修学時代の法然上人も恐らくこの道を通つたことであらうと思えば、また、感慨深いものがある。否もつと峻しい道であつたに違いない。奥山奥のもつと谷深い所であつたろう。だからこそ黒谷は聖たちの住房にふさわしい地ではなかつたか。諸堂から遠く離れ、政治のちまたにわずらわされることなく、修行するには住坊から遠く離れた所でなければならなかつた。こんな事ども考えつつ歩むこと四十分ばかりで、谷間に近く墓石が見えて来た。「墓石があるのは近くに僧坊のある証拠だ」等と声をはげますうちに、忽然と現われた一つの堂があつた。この建物こそまぎれもなく黒谷青龍寺で、山門前に「黒谷青龍寺」と石に刻まれてあつた。

二

黒谷は三塔十六谷の中、西塔北谷にあり、古くは此処に大黒天が安置されていたので、大黒谷と呼ばれていたが、何時にか略して黒谷と呼ばれてしまったらしい。谷が極めて深いので、横川と共に幽棲の地として、心ある僧達の世座をのがれる場所となっていた。彼等は聖と呼ばれ、名聞利欲を断つて仏道の修行に専心し、念仏も極めて盛んで、二十五三昧会も行われていたということである。禅瑜（長西録）や浄意（拾遺往生伝）・善意（後拾遺往生伝）もここに住んでいたし、法然上人の師であった叡空も道心深い念仏者で、黒谷の住人であった。

法然上人が未だ勢至丸と呼ばれていた頃、始め父の非業の死にあい、その遺命によって叔父観覺の許で業を修めたが、それにあきたらず、母に別れを告げて道を求めるために京都に上り、叡山の源光や皇円の膝下で天台を究め、学問も日に月に進み、一通りの学問を身につけることができた。しかし上人の求める宗教は名聞利欲出世のためのものではなかつた。

多くの夢をいだいて比叡のみ山に登ったとはいれ、其処にはべる山法師達は、事あるごとに大講堂の庭に集って、宗教的な權威を笠にきて、朝廷をおびやかす強訴するのが常であった。彼等は聞法求道の道を修するどころではなく、武芸の精進にいそしんでいた。又高僧知識といわれる僧であつてさへも、自らの榮進を望むという有様で、みにくい争いも幾度となく耳にした。谷をへだてた横川でさえも、争乱のたけなわだった頃は、そのおかりを受けて修行をつむことが出来ないと歎いた僧も幾人かいた。そして山上で牛馬を飼育したり、武器を貯えるものもあつたらしく、厳しくこれを禁じたこともあつた程である。このような事を耳にし、目にしたのである。上人は、静かに仏法を学ぼうとして、皇円の許を去り、聖たちの住む西塔黒谷の叡空の門を叩いた。黒谷は谷が深く、山法師たちの刀杖の音も響かないし、経蔵には一切経がみちみちて、修行し学問を修し、思索を練るには絶好の場所であつた。漸くにして心の落ち着きと、静かな時間をもつことの出来た上人は名を源空と改めて、ひたむきに

生死をはなるべき道を求めた。その道は自分だけ解脱すればよいというのではなく、貴賤男女老若を問わず誰でもが修し易く行じ易い解脱の道でなければならなかった。そのためには五度までも一切経を読み、読みつづけた。今も上人が読んだといわれる経蔵は、昔ながらに「報恩蔵」と呼ばれ、本坊の前にあるけれども、年移り月變つて、今ではその面影さえ留めぬ近世の建物である。源空が此処に在山したのは二十五年の長い間であつた。思索に思索を重ね、ただお念仏をとえさえすれば、誰でも極楽浄土に往生することができるといふ易行易修の法門を発見され、静かに専修念仏を弘めるために下山され、京都の町に赴いたのは承安五年（一一七五）春のことであつた。

三

幸い在山中の老婆に心よく迎え入れられ、報恩蔵を拝し、八間四面の広さをもつ本堂に請じられて、回顧をすませた私達は、自作と伝えられる法然上人の御像や一枚起請文の摺本を拝見した後、堂後の曾って生き仏として

この世の尊敬を一身に集め、百三歳の長寿を全うしてなくなられた知恩院の門主山下現有上人が、毎夏黒谷を訪れて宿られた一室で、暫らく休憩をとることにした。遠く比叡の山波を見渡す谷深い黒谷に訪づれる道俗も可成り居るらしい。それ等の人達は念仏を紐帯として、結ばれた同行者で、中にははるばる東



御廟前父子地藏

北の地から毎年訪づれる人もあるとの事、全く頭が下がるばかりである。念仏は未だ生き生きとしていると感ぜざるを得ない。誠に有難いことである。

前方に広がる山々の木立は最近、戦後何処にもおしよせた経済界の荒波に、叡山在山の人々の生命を保つために売られて伐採せられた由で、おしい気もする。外に何のすべもなかったのか。ここにも今後宗教界の歩み行く指標に何か横たわる不安と、どうしても新らしい方策を立て、永久の策としなければならぬ打解策を立て直す必要のあることを痛感する。

茶の一服をすすめられて語る。電灯もなく訪づれる人とても何人が数えることしか月にないであろう人里離れた谷合いに住む老婆の生活も容易なことではないらしい。どこことなく気品があり、大阪あたりに住んでいた在俗の老婆が何故此処に住むようになったかは、何か深い事情もあるらしいので強いて聞こうともしなかったが、余程の決心がなくては長らく住むにたえないであろう。時折聞えるウグイスやホトトギス等

の小鳥のさえずりも何か深山にいるような感をあたえるし、小鳥たちも時にはこの御堂を訪づれるとのこと、夏には凡そ六十種ばかりの小鳥が山野にとびかよい、年間を通ずると、その数も百数十種に及ぶらしい。談は何時しか山下上人のこと、教学大会で問題となっていた立教開宗の年時だとか、黒谷在住当時の法然上人、引いては難行易行から深山における生活など、次から次へとはずんで何時尽くとも知らないが、余りおそくなるので、席を立ち、掃き清められ、塵一つ残さぬ境内を一巡し、古い五輪塔等に目をやり、法然上人の昔のことなど感慨深く思いふけりながら、青龍寺の脇から大原道に通ずる、うっかりしていれば前にのめりそうになるような、水の流れによってつくられたであろう急な坂道を、老婆の別れを惜しむ鐘の音に、何か心に打つものあるを感じつつ、まっしぐらに三十分ばかりで下山し、京都駅にと急いだ。

×

×

×

近代高僧伝

大村桂巖伝



い、浄土宗高等学院、第七高等学校を経て東京帝国大学文科大学哲学科を卒業したのは明治四十三年、三十一歳の時であった。その後京都東山中学校長を振り出しに、陸大教授、大正大学教授、芝中学校長など専ら教育の面に尽力し、大正大学々長になったのは、昭和二十三年、六十九歳の時であった。その後も名誉教授として教壇に立たれたが、同二十八年十一月より発病し、同二十九年十月二日、七十五歳で遷化せられた。

大村先生最後の講座は、私が正大二年（昭和二十七年）の時開講された教育原理であった。終戦後で学生も未だ浮足立っていた時分であるが、先生の授業は特別で、教室に入られる前にされるいつもの咳払いで、ぎっしり詰った教室は一瞬静かになり、近くを走る都電やバスの音のみが耳障りになった。講義は非常に早口でノートを取るのに苦労したが、

て来ても、学生の遅刻は絶対認めず、いくら答案が出来ていても一年生には単位を下さなかった。学生は笑顔を見せたことのない先生として恐れたが、その反面非常に慕って、少し遅くなると教室の机や椅子は足りなくなり、良い席で講義を聞くことは不可能であった。この珍現象は先生の徳の持たらしめた所以であらう。

その主題とする「宗教情操教育」のところは、ゆっくりと力強く何回も繰り返し、小さな体で何十人もの学生を圧迫するその迫力は凄いものであった。

先生は非常に厳格で、自分が三十分遅刻し

先生は、明治十三年二月十日、滋賀県愛知郡葉枝見村三ツ谷、常光寺住職哲誉上人の長男として生れ、幼名を里磨といった。九歳の時に厳父を失い、宮川順桂上人について得度し、桂巖と改名した。十三歳にして母を失

三回忌の法事で先生の旧恩を偲ぶ人達が集った時友人のA氏はこう語った。「大村君は人の悪口を絶対いわず、美点のみをいう人であったから、大村君の前で他人の悪口をいうと、こちらが恥かしくなった。」また多く集った勢至会の人達は、よく叱る先生で恐しかったが、可愛さ余って叱る気持がよく分かったと当時を懐かしんでいた。このようなことは誰にでも出来ることではない。敵のない大村先生と慕われ、あくまでも自分の意志を通せた所以もここにあるのであらう。

一方家庭における先生は実によいおじいさんで、愛孫彰道君はこう語っている。

祖父は祖母がなくなってから、よく自分で押し入れに首をつっ込んでなにかを探していた。すると十回の内、三回は頭を押し入れの上板にぶつけた。僕が何回も、「ぶつかりますよ。」といっても、ぶつけてしまふ。どうしてああぶつけるのかわからない。ぶつけた時の顔は、全く見ちゃられない。ひたいにふとい筋じわをよせ、口を横にまげて、鼻の穴をつぼませる。そして、どんぐり目をして頭をさかんになぜて、「ああ痛あ、ああ痛あ」といっている。そのかっこうが、おかしいやら気の毒やらでなんといっているかわからなかった。

また或る時剣舞を教えてもらったことを思い出して、
まず祖父は着物の裾をからげ、鉢巻をきめて、「ベンセイーシュクシュク」とやり出した。一人でよい気持になっているが、どうも余分な所が入るらしく、語調にあわなくなるところもあった。僕がぼかんと試みていると、いきなり僕の木刀をぽかりとたたいて僕をおどして又やり出した。

同じく愛孫桂子ちゃんの記によると、

おじいさんは眼鏡を上にあげて私たちを見ながら、「フラダンスをみせてあげようか、おもしろいよ。」といって、はかまをはいておしりを横にふったり、たてにふったりしながらはじめた。おばあさんもつられておはしでヤカンをたたきはじめました。おじいさんは時々舌を出したり目をグリグリしておもしろい顔をして見せてわらわせました。すこしたつと「ああつかれた、今度は桂子と澄子が何かやる番だよ。」といったので「夕やけ小やけ」をうたいながら二人でやったら、おばあさんは目じりにしわをよせながら首をふって、おじいさんはいつのまにか手をたたきながら調子をとってくださいました。

この彰道君や桂子ちゃんの追想は、誰しも想像しない、いや絶対想像出来ない先生のユーモラスな一面を物語るものであろう。それもさることながら、家庭における良きおじいさんぶりは、旅行先から必ず、

彰道へ

宗安寺には せみがたくさんいて いろ

いろのせみが やかましいくらい ない
ている もう ほうしぜみも ないてい
るよ 釜寺はどうだね 私は明日 木の
本の地ぞうさんのお寺へ行きます 明後
日は 瀬田川を船で 立木観音さんへお
まいりに行きます それから和歌山へ行
きます 桂子 澄子へ よろしく

(二三・九・一)

などと、易しく書かれた数多くの手紙によって十分推察される。ついでであるが、この手紙は先生が正大学長になられた昭和二十三年の夏、大学復興寄附勸募のため、関西方面に旅行された時、近江で書かれたものである。文中宗安寺は彦根で、木の本の地獄さんは古刹浄信寺である。白鳳三年創建された金光善寺といつて難波からこの地に移されたことになっているが、賤ヶ岳の戦で焼失し、現在の堂宇は徳川中期以後のものである。

先生は詩歌をよくし、俳画はことに有名であつて、数多くの遺品が現存する。しかしながらその特意とする俳句について面白いものが残っている。それは

パーマノントの小犬嵐に狂ふ桜哉

汽車の中で

汽車が走っている。車掌さんがやって来て、「大分混み合っていますから、お気の毒ですが、みなさんどうぞ譲り合って三人がけをやって下さいませんか」といった。

しかし、だれもキウクツに席を譲ろうとはしない。次にまた現われた車掌さんは「せめてひじかけでも貸してあげて下さい」と再び申入れた。一、二の人が少しばかり体を縮めたが、他は依然として何の動きもおこってこない。すこし自分が腰を右か左によければ一人かけられるのに平気でいる。前に立っている人々を棒か木ぐらいにしか思っていない、人間とは思っていないのだろうか。

ところが、そういう人たちは、社会意識も人間感情もないのかといえそうではない。

いったん知人に会うと、「やあ、これは暫く、まあどうぞこちらへ」と同席の人をおしのけてもムリに腰かけさせる。つまり人間感情がないのではなく、ただその輪が小さく知人の間だけに限られているのである。その社会意識がただ親類や友人間の中にだけ留まっているのだ。

だれでも社会道德ということを知っている。しかし、それはただ単なる徳目として形式的に知っているだけのことが多い。西洋では、このような意識と感情とは、生活にまでしみこんだ長い宗教的教育によって養われた。

われわれは「知る」ことはできても、「感ずる」ことはできない。精神革命の必要なゆえんがここにある。

列車という一小部分さえ満足には変革されていけない。それで一国の社会民主化ができるはずがない。結局は人なのだから。

(M 記)

背なの子は無心に笑みて桜哉

というように、どうにもこうにもならない目茶苦茶な句を作って「……桜哉」で片づける傾向があった。これらの数句によっても性格の一面がうかがわれ面白い。

それはともかくとして、近頃いやに宗教情操教育などと騒がれているが、先生は早くも明治四十四年からこれ一筋に努め、実践して来られたのである。その業績は誠に偉大であり、先見に感服せざるをえない。

遷化間近な或日、私は淀橋病院に先生を見舞った。折よく体の具合がよい時でお話をうかがうことが出来た。その時先生は「わしは残念だがこの年になっても未だ解脱出来ない」といつて歎かれていた。これを聞いた私はしばし呆然となった。しばらくしてグサッと胸を抉られる思いがして我に帰り、その偉さに感極まった。一体誰がいろいろな言葉であろうか。「解脱」という字を見ると先生の面影を偲ぶ私ではある。

(鈴木成元)

夏の衛生

杉田暉道



漸やく春が来て暖かくなつたと思つてゐる中に、何時の間にか夏がやつて来てそろそろ暑くなつて来ました。毎年この様な季節になりますと、食欲が減退し健康を害する人が多いくなります。夏の食べ物の話になりますと、きまつたように土用の丑の日が出て来て、鰻が登場します。そして「夏やせを防ぐには、あの脂ぎつた鰻はもつてこいだよ。脂肪に溶けるビタミンが多く含まれているからね。」と学のある話をよく聞かれます。

ところで夏になると、どうして食欲が減退

するのか現在の医学の研究においては、未だ完全にはわかつておりませんが、凡そ次の様な事が考えられております。先づ第一に、胃の中にある消化液及び塩酸等が非常に減少します。次に基礎代謝が減少します。之は特に女子に著明です。基礎代謝とは、体を安静にしている時に人間が生きて行くに必要な最低のカロリーをいいます。

以上の様な体の機能の低下から、食欲が減退し、一般に野菜の様なあっさりしたものが好ましくなり、又俗にいう夏やせも起きてくるわけです。これから述べます病氣の原因も此等が、非常に重要な役目をして居ります。

それでは、この季節にはどんな病氣にかか

り易いかといえますと、先に述べました通り胃の消化液及び塩酸が減少しますから、胃腸の消化力及び口から飲食物と共に入った病原菌の殺菌力等が弱まりますから、どうしても消化器系の病氣が多くなります。即ち胃カタル、大腸炎等のものから、赤痢又は疫痢等の重いものが多くなります。

胃カタル及び大腸炎等の、単純な胃腸疾患は、飲食物の不摂生、変質した食物の摂取、寝冷え及び過労等によつて起るものが大部分です。人によつては余りにむし暑いとか、温度が急に上昇する時に起る人もあります。又最近になつて、特殊な大腸菌等が原因になる事もある事がわかりました。

次に赤痢に就ては、御存知の様に赤痢菌が人の口から入つて起る病氣です。口から赤痢菌が入りますと、二日から七日位たつて、発熱、下痢、腹痛、嘔吐という様な症状が現われて来ます。この赤痢にかかり易い年令は何歳位かと申しますと、一歳から五歳迄の乳幼児が最もかかり易いといわれています。又老人もかかり易いのです。一歳以下の乳児及び新生児（生後十日間迄の乳児）の中で、新生

児と母乳のみで育っている乳児は赤痢にかかりません。之は乳児の便が酸性かアルカリ性かという事によって違うのでして、母乳のみを飲んでゐる乳児の便は酸性の為に赤痢菌の繁殖に都合が悪いのです。その上、母乳を飲んでゐる乳児の腸の中にはビフィズス菌という腸内細菌が殆どで、之が赤痢菌に抵抗して繁殖を防ぎます。従つて人口栄養の乳児及び離乳後の幼児は赤痢にかかり易いわけです。

そこで赤痢と疫痢とはどう違ふかといひますと、我々は赤痢の劇症型を疫痢と呼んでゐます。所謂疫痢年令といわれている子供が、赤痢にかかり疫痢状態を示した場合をいひます。では疫痢症状とはどんなものかといひますと、一番ひどいのは脳症状です。多くは嗜眠で始まり、痙攣（ひきつけ）又は手足をバタバタさせてあばれるという様な事が特徴です。更に赤痢の場合と同じ様な膿血便を出しますが、其他に吐血（コーヒカすの様なものを吐く）があります。何故、幼児だけが疫痢にかかるかという問題は非常にむづかしく、未だにまだよくわかっておりません。

次に治療ですが、先づ第一に皆様をお願い

したいのは、家庭療法を絶対にしないで下さいという事です。疫痢は家庭療法は勿論出来ませんが、赤痢を家庭療法で治しておられる方は結構居られるのではないかと思います。

勿論赤痢と気づかず単に下痢と考えて売薬で治して居られる方もおられるでしょう。この様な時に、その下痢便の中に赤痢菌がいたならば、下痢だけ治しても赤痢菌はとれず保菌者という事になります。この人が世間に菌をばらまく害は大変なものです。又、最近赤痢菌が薬に対して、抵抗性を持つようになり、前に効いた薬が今日では効かないという事が起る様になりました。従つて夏期に子供が発熱、下痢、腹痛等を訴えたら直ちに医師に診てもらつて十分な治療を受けて下さい。

では、この様な消化器系の病氣にかからない様にするにはどうすればよいでしょう？

それは、物を食べる前には必ず流水で石鹼を使つて手を洗う事、子供に外での買い食をさせない事、出来る限り煮た物を食べる事、十分に睡眠をとる事、環境を清潔にしてハエなどが居ない様にする事等です。ハエは赤痢菌のいる便を方々にまきちらす恐ろしい媒介動物です。赤痢菌は必ず口から入ります。即ち手と食物と食器に十分に気をつけなければいけません。

次に問題になるのは、日本脳炎です。之は或る種の蚊によつて病原体が媒介される病氣ですが、蚊に刺された者すべてがこれにかかるものではなく、その中のごく一部のこの病氣に対して抵抗性の少ない人だけがおかされるわけです。特に十歳以下の子供と老人に多く見られます。蚊に刺されて病原体が体の中に入つて一週間位たちますと、頭痛、不眠を訴え出し、やがて高熱、意識濁濁、嘔吐、痙攣が始まり、うわごとを言ったり、昏睡状態になったりします。この病氣で死ぬ者は大体十人の患者中三人の割合という恐ろしい病氣です。治療法も特別なものはありません。ではこれを予防するにはどうしたらよいか？先づ蚊の発生を防ぐと共に之を撲滅する事が大切です。蚊の発生しそうな水溜り、やぶ、草むら等をなくすか、DDTやBHC等の殺虫剤を撒布して、蚊の発生を防ぐ様に努めて下さい。蚊張や網戸で蚊にさされない様にする事も大切です。現在厚生省が主体となつて、ハ

エや蚊をなくする運動を全国に拡めておりませんが、これが実現すれば、ほんとに楽しい夏となる事でしよう。次に注意すべき事は、夏は平生でも体の抵抗力が弱まりますから、睡眠を十分にとり、子供は日中の暑い盛りに外で遊ばさないで日蔭で遊ばせ、帽子を必ずかぶる習慣をつける事も必要です。又この予防

注射も必ず受けて下さい。

最後に結核について述べてみたいと思います。我々の体の中に結核菌が入ったかどうかを見る方法にツベルクリン反応がある事は御存知の方が多いと思います。そうして体内に結核菌が入るとこの反応は陽性となってツベルクリンを注射した所に発赤が出来ます。注

座頭の妻

盲目の大学者、塙保己一^{はなわ ぼくいち}は七歳の時失明したが、その後、志を立てて勉学にいそしみ、血のにじむような苦心のすえ、当代第一流の学者となり「群書類従」の編さんを完成したことは著名である。

一方、信仰心もきわめて厚く、常に、般若心経を誦読していたといわれる。しかし彼とても結局は人の子、ことに盲目の不自由さから、時には不平不満も出、その上人以上に鋭い神経の持ち主丈に、そのそばにつかえる妻女の苦勞は一通りではなかった。不具者特有のひがみをおこさせまいと、ささいな言動にまで気をくぼつてい

た。
ある年の八月、十五夜の名月の夜、客を招いて観月の宴を張った。客人達はそれぞれに、声をあげて月を賞していたが、盲目の彼には何の感興もおこらなかった。孤独のさびしさに耐えかねて、彼は一句を吟じた。

花ならばさぐりても見ん今日の月

これをきいた妻女は、夫の心根を察して、名月は座頭の妻の泣く夜かな

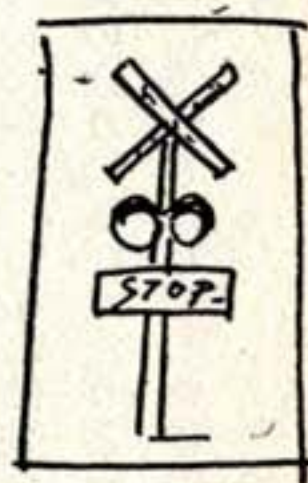
と答えた。妻のこのやさしい思いやりに、今までざわめいていた客も、しんと静まって、夫妻の心意気の余りにもびったりと一つになっっているのに、涙さえながしたのである。

意しなければならぬのは、このツベルクリン反応が陽転した方々です。即ち陽転したという事は、結核菌が体内に入ったという事であって、発病する人は、殆どが結核菌が体内に入ってから一年か一年半以内に起るという事がわかってからです。併し結核菌が体内に入っても殆どの人は発病しません。不幸にして体内に入った結核菌が活動し易い様な状態にした人々が発病するわけです。そうしてこの様な状態になるのは、前述のツベルクリン反応陽転後一年又は一年半に起るのが最も多いのです。この様なわけですから、ツベルクリン反応陽転後一年以内の人は特に夏季には体に気をつけて下さい。過勞を避け、栄養のあるものをとる様に心掛け、海山へ行くのも控め目にして下さい。

以上、子供に関連の深い二三の病氣を中心として、夏季の健康上注意すべき事を述べました。併し、これは子供ばかりでなく、勿論我々大人にとっても重要な事であります。甚だまとまらなく、わかりにくいとは思いますが、少しでもお役に立てば幸甚です。

(医学博士)

心の鬼



昔、インドのザンダーラ国に、一団の旅役者がいた。村々、町々で芝居をしながら、諸方を流し歩いていった。

或る村までやって来たところが、大変な不入りで、すっかり閉口してしまった。村人は気の毒に思つて、村から山越しに行けば大きな町があつて、そこの人々はみな有福で、きつと芝居も好きだろうから、是非、その町で興業をするようにと教えてやった。

旅役者達は喜んで、早速出発の仕度にかかったところ、別の村人がやって来て、山むこうの町へ行くのはよいが、途中の山の中に、近頃鬼が出るとのことだから、用心して行くようにと注意した。

これをきいて、役者達は、そんなおそろしい山を越すのをやめて、別の町へ行こうかと相談したが、しかし、みすみす大入りの見込みのある山むこうの町を諦めめるのも残念な

ので、勇を鼓して、出かけることにした。旅の準備に手間どつて、出発の時刻が悪かつたために、山中で日がくれてしまった。やむを得ず、野宿をすることになり、鬼の来ぬようにと、大きな焚火をして、交替で一人づつ起きて番をすることにした。

夜も段々ふけて来ると、山氣も急に冷えて来て、不寝番の男も寒くなつて来たので、何か着るものはないかと、芝居の衣裳の入った箱から、手さぐりで衣類をとり出して、それをかぶつて、火にあたっているうちに、どうやら体も暖まつて来たのか、急に眠氣がさして来て、ついウトウトと居眠りを始めてしまった。

ところが、その男が手さぐりで引張り出して着たのが、あろうことか、鬼の衣裳だったので、ねている一人が、ふと目をさましてみると、焚火のそばに、一匹の鬼がいるのをみ

西洋の幽霊

日本のうれしいには、女が多い。日本ではつい最近まで、男尊女卑で、女性がしいたげられていたため、それだけ、この世へのうらみやみれんが男より多かつたからだろう。これから、きつと、日本にも男のうれしいの数もますことである。その点、西洋では、幽霊の世界も、男女同権らしい。ハムレットに出て来る。父王をはじめ、男のうれしいが可成りいる。中には、夫婦で仲よく出て来るうれしいが、アイルランドの田舎にはいるそうである。まったく、うらやましい次第である。

それから、もう一つ。西洋のうれしいには足がある。日本でも、ぼたんどろろに出て来るお露は、カラソコロソと下駄をはいていたらしいが、そのほかに、足のあるうれしいは余りない。西洋では、元気に、靴音高くあらわれてくるのがあつた。ポーの小説に出て来るうれ

つけて、大いにおどろいて、「さてはいよいよ鬼が出たとばかり、あわてふためいて、ほかのねている連中を叩きおこして、一目散に逃げ出した。

その騒がしさに、鬼の服を着ていた男も目をさますと、何が何だか分らぬが、みんなが顔色を変えてにげて行くので、置いて行かれでは大変とばかり、皆の後から、夢中になってかけ出した。先に逃げ出した連中は、自分達の後から、鬼が恐い勢いで追ってくるので、益々恐怖にかられて、道のないところを夢中になってかけ出す。やぶも、いばらもおかまいなしで、かけにかけたのである。後からついて行った鬼の服の男も、むやみやたらに、皆の後について、いばらや、やぶをかけぬけて行ったが、その内に、着ている鬼の服がいばらに引かかって段々にぬげて、もとの姿にかえった。前を逃げていた連中の一人がふとふりむくと、鬼はいつの間になくなって仲間の一人が、一生懸命、かけて来るのがみえた。やっと鬼からのがれることが出来たと思って、仲間にも声をかけて、一同手を取り合って喜んだ。

疑心悪鬼を生ず。人は往々にして、自分の心に描いたことに、われ知らずあざむかれて、あらぬ騒ぎをするものである。

(百喻経より)

人の心というものは、さながら水に映る月の影のようなものである。波のない、鏡のような水面ならば、円い月はそのままだ円い姿に映されるが、波立った水面では、その波の状態に応じて、ある時は楕円形にも、三角形にも、そして時には千々に乱れて、ほとんどあるか、なきかさえあきらかでないようにみえる。

皎々と照り映える月そのものには、円いまままで何の変化もないのに。

人の心もその通り、こちらが明鏡止水、何のこだわりもないときには、相手のことが円いままに素直に受け取れるけれども、こちらの心が波立っていると、月影の乱れと同じことで、相手の言葉や行いが、乱れて映ったり、歪んでみえたり、尖っても感じられたりするものだ。問題は相手より、こちらの心次第ともいえよう。

いなど、その代表だと思う。日本のうれしいには何故足がないか。これは「日本のうれしい」の担当者にまかせて、西洋のうれしいに、足のあるわけはなぜだろう。

西洋人の信仰では、死んだ者は、長い旅をして、遠いあの世に行くという。旅をするには、どおしても足が必要、というわけである。ドイツには、つい百五十年程前まで、死んだ者は、永い旅路の末、蛇の橋を渡って死者の国へ行く信じられていた。ジョン・パンヤンにしても、ダンテの神曲にしても、みんな、永いつらい旅路ののちに、死の国に行きつくのである。うれしいには、旅客飛行機や高級車はないとみえる。

鬼に角、日本のうれしいが、若い女のようなよとしたのにくらべて、実に現実的に、堂々としているのが、西洋のうれしいの特長らしい。西洋のものの考え方、感じ方が、そうであるように、めそめそなどしてないらしい。

逆縁を喜びつつ

大 門 俊 我

「方丈さん！ 先達はいろいろ御心配をかけました。実は今日その事について一つ聞いて頂きたいと思つて参つたんですが……」

と檀家総代の筒井さんは語り初めました。度胸一つ腕一本で一代の間に機業場の多い大野地方でも屈指の機業家となり徳望も高く大野市教育委員、大野織物組合理事其他の要職にある筒井儀三郎さんですが去る一月九日午前六時三十分祝融の災に遇い一瞬にして五棟の工場と住宅を失いその上道路一つを距ててある寄宿舎まで半焼してその日から雨露を凌ぐ場所さえも失くして仕舞われました。

「実はあの朝私は勤行の最中あの事故に遇つたのです。あの火事後十日程して町内の集会の場所で近所のAさんがいわれるのに「私はあの朝筒井さんの家の前を通りまし

た。すると工場から黒い煙が上っていました。ので変だとは思いましたが二階では貴方の勤行の木魚の音がしていました。勤行しておられるのだから家の人が起きておられるのに工場の煙を御存知ないという事はないと思つて通りすぎました。」と、又Bさんは「私もその煙を見ました。然し今日は土曜日で電休日、然も筒井さんでは工場の新年会だという事だから何か煮焚でもしておられるのだろう。だが余程変な煙の出様だから注意しようかと思いましたが二階からは貴方のお念仏の証結の音が聞えておりましたのでそんな心配もいらんような気がしてその儘通り過ぎました。あんな位ならあの時注意してあげるのではした。」と私は電休日で工場の休みでもあり平日よりは余計気長に「こうして今日も無事に工場の新年会を出来るのも親先祖の御陰、仏様の御

恩」と思つて「願我心淨……」より初めて阿弥陀経を上げお念仏も殊更に長く称えておりました。今思えばその間にどどん工場では火が拡がっていたのです。して見ると私は殊勝に勤行をしておったばかりにあの火事に遇つたようなものです。或は勝負事に耽り、或は道楽をしていたり、或は温泉へでも遊びに行っている間に焼けたのなら諦めもつきます。然し夜就寝前には必ず工場を一巡し冬の最中でも毎朝六時にキチンと起き、先づこの機械の御陰、工場の御陰あればこそと工場の機械と神仏を拝み、次には親先祖の御恩を思つて仏壇の勤行をし、終つて朝食、七時までには工場へ出て出勤される工員さんの「お早う」の挨拶を心で合掌して「皆様の御陰あればこそ。」と拝んで生活させて頂いておる事三十年来の私の毎日の日課です。ですから隣近所の人は私に「目覚し時計」とアダ名している程です。然も三十分か四十分の勤行最中にこの災難に遇うという事はどういう事でしょう。これの一つ御伺いしたいのです」。

こう問いかけられて普段から世の徳望高く寺の檀家総代としていろいろ寺の為にも力を

信 仰 実 話

尽し信仰心も篤い筒井さんを知っておる私だけに胸の熱くなる思いがしました。

「筒井さん今度の事は誠に御気の毒でした。

貴方のような徳望あり信仰心の篤い方があの災難に遇われた事を見て私は愈々仏教でいう因縁という事を有難く思います。人は各々その作る業によって善悪の業の結果を受けねばならんといひます。現世において因縁を播き、現世で果を摘んで行く人もあり、或は過去世の業因を今摘む人、或は今の業因を来世で摘む人もあります。この因果の道理だけは仏様もまげる事は出来ないといひます。只仏様を拝む功德、お念仏の功德でその受ける業果を幾分軽くして頂く事は出来るという事です。

これをお念仏の不求自得の御利益といひます。成程貴方は丸焼けに遇われましたがあの急な災難の中に家族初め誰一人怪我人もなく又他人様には少しも火を及ぼさなかったという事はまだしもの幸です。今度の災難は貴方の過去世の業因のいつかは当然受けねばならん業果であつたと思つて下さい。貴方にしてそんな心配はない

と思いますがこんな時こそその心の隙間風に乗つて迷信邪教が忍び込んで来ますよ」。

「実はその通りなんですよ、方丈さん！

或人は貴方の弟さんの霊を弔うて上げないからだ、といひます。又工場の寄宿舎におります天理教のお婆さんは、「ソレ見よ筒井さんはどんなに仏様に御詣りしておつても丸焼けになる。私は天理教の神様の御陰で火事に遇い乍ら私の処だけ焼けなかったではないか。」といひます。全くその通りなんですから迷います。外の人が横道へ這入り込んで行くのも無理ないなアと思ひました。然し方丈さん、私はまだそんな言葉に迷うて歩く程血迷うてはおらん積りですから安心して下さい」。

「そうでしょう。私は火事の最中御見舞いに行つた時貴方の態度様子を一目見て「しっかりしておられるなア」「信仰の力というものはこんな時に出るものだなア」と思ひました。同じく貴方の工場の一隅に住んでおつて丸焼けに遇われた工場の事務長のMさんの態度と比べて見て一層その感を強くしました。善導大師の発願文ではないがMさんは全く心転倒し、錯乱し失念して挨拶処か私の誰であ

るかも分らないようなウロタエ方でした。それに引かえ貴方の「お騒がせして申訳ありません」といわれた静かな挨拶の言葉に返つて此方がウロタエているのでないかと恥かしくなりました」といふ私の言葉につれてあの事故の朝の様子を筒井さんは静かに次の様に語りつぎました。

「先程お話しました様に私は朝の勤行を漸やく終りお念仏と共に下へ降り何時もの様に女中の仕度して呉れたお膳に向ひ食作法とお十念を終つて箸を持つとした時です。工場の方で「キャーッ」といふ異様な声に工場の入口まで飛んで行つて見ますと工場内は既に煙の渦巻で手の施しようもありませんでした。早速取つて返して「家が火事やぞーッ」と家族の者を大声で起し先づアチコチの非常口の鍵を外し二階へかけ上り今まで拝んでいた仏様三休それに運びやすい木魚、鉦鉦等も風呂敷に包み下へ下りて子供に近所のお宮さんへ預けさせました。その時には近所の人が手伝いに見え一人一人がダンスの引出しを一本づつ運んでいたのので「それでは能率が上らん、貴方は此処、貴方は其処」といふように

信 仰 実 話

タンスから家の外までリレー式に物
を運ぶ様指図して再び二階へ両親の
写真の額を下ろしに上ろうとした時
はもう駄目でした。家の中はそれで
諦めて家族達を避難させ、表へ出て
見ると既に消防ポンプが来ていて呉
れて工場の方へ筒先を向けようとし
ていたので私はそれを止めました。

「工場はどうせ助からん、他人様に迷惑をか
けては申し訳ないからどうかこの隣りの家に火
が移らないよう守って上げて下さい」と頼み
裏へ廻って見るともうアチコチの大小様々の
ポンプが見えたので之でよしと思って身
仕舞いをして挨拶受けをしておりました」と
「その寸分隙のない処置、態度、これこそ信
仰の強い力、仏教の御力ですよ」と申し上げま
すと筒井さんは更に次のような心温まる心境
を語って呉れました。

「方丈さん！ 今度の火事で私は全く無一
物になりました。少しは出たかと思つた品物
も行衛知れず、さりとて他人様に迷惑をかけ
た張本人がその行衛を詮索する事もならず、
下駄一足帽子一つに至るまで失くして仕舞い

ました。

昼大勢手伝いの人のいる間は何かと心も取
紛れてそうも思いませんが夜も更けた真夜中
頃千五百坪に余る焼跡に只一人立って見ます
と昨日まで立派に建っていた工場の影もなく
焼跡のアチコチに積まれた残骸、二三カ処に
チラチラと燃え残っている昼の人足の人達の
残していった焚火、折柄中天にかかる澄み切
ったお月様に照されて静かに考えて見ますと
小学校を出るか出ない間から父親の車の後押
しから初めて今年六十二歳、思えば苦節五十
年、その長い間の汗と脂の苦勞が一瞬にして
消え去ったと思えば全く断腸の思いとはこの
事かと思ひました。然し方丈さん！ 私は喜
んでいます。物はスッカリ失いましたがその
代り心の頂戴物を致しました。失礼乍ら明日
のお米にも困るのでないかと思うような隣近
所の人々から「誠にお気の毒でした。こんな
ものでも着て下さい。」と心から持って来て下
さる足袋一足、シャツ一枚の有難さ、尊さ、
名前の知れない人からの送り物、よくよく考
えて見れば三十余年前の兵隊時代の戦友さん
が新聞或はラジオで聞いて送って下さった庖

扉の御法語

ひとと問答していて、フト身につまされる
ことがあります。この御法語もそういった時
に上人がつくづく申された言葉、疑いはお前
たちばかりでないのだよと易しくさとされた
お言葉にとれます。

誰でも、時には善をはげみ惡を断たんもの
と強く決心します。しかし悲しいかな善心は
日と共に紙の如くなり、惡心は猛然と勢いを
増してきます。煩惱は払えども去り難く、菩
提の月は、とらえんとすれば水面がくずれて
見えなくなります。いつもながら上人の腹の
裏まで見せての御法語に、温みと懐しさと有
難さを感じます。

この御法語は、念仏往生要義抄の中にある
お言葉です。要義抄はいくつかの問答として
記されていますが、その中で「聖人の申す念
仏と在家のものの申す念仏と勝劣いかむ」と
の問に答えられたものの一部です。もとより
お念仏の功德に聖人とか在家とかの区別はな
いのですが、その人は更に「この条なを不審
也」と抗弁しました。戒律を守って精進して
いる者と平々凡々の者と一緒にされては、せ

信 仰 実 話

丁三本に缺一丁、火事に遇うたればこそ人の真心のお裾分けに預かれる有難さを泌々と涙で頂戴致しました。殊に有難く思ったのは私の長男の事です。方丈さんも御存知の様に昨年から京都の大学へ行っていますが、その長男がこの正月に帰って来ての事です。高校時代の友達を女も交えて十一人連れて来て酒三升にビール十本をあけて、夜中の二時、三時までドンチャン騒ぎです。この様子を見て私は余程注意しようかと思いましたが自分も酒では人後に落ちん方、この頃の若い者に注意しても仲々聞くものでなし、マアマアと思っ

て見逃しておりましたがこの調子では「浮いたか瓢箪式の情ない息子」が出来るのではないかと冷汗三斗の思いでした。処がその長男が火事の知らせで帰って来ての事です。影も止めない焼跡を見て物をもいわず只ポロッと大粒の涙を流しておりました。が親類の家で雑居の一室を明しますと此方から何もいわないのに私の前へ両手をついて「お父さん僕学校をやめます。これから一生懸命お父さんの手伝いします。」

と真心を面に表していうて呉れました。そして親類の写真機を持っていく友達を呼んで来て家にいる弟達を連れ出し兄弟四人が焼跡をバックに写真を撮りました。そして弟達にいい聞かせる言葉を聞いていると「これから困った時はなア、この写真を出して見て皆んなで力を合せて一生懸命やろうなア」というているのを眺めて私は有難いなアと思いました。到底自分の力では叶わない息子の心も火事に遇ったればこそ此処まで思い直させる事が出来たとはこの災難に遇えばこそと思うて嬉しさで一杯でした。私もこの災難で十年若くなりました。災難の為心配で身体は十年老けたかも知れませんが心の上では「もう一辺頑張らねば!」と十年若返っています。安心して下さい、方丈さん! 皆さんのお陰でもう後の工場の復興にかかっています。と、時宛かも一月の末窓外を眺めればチラチラ粉雪の降る寒い最中乍ら何かホノボノとしたものを感じました。

「生死共に煩いなし」と仏様に任せ切った法然上人のお念仏信仰の尊さを味わい誠に近來にない有難さを共に喜んだ事でした。(終)

(福井教区長・大野市立保育園長)

っかく努力して清浄に暮している者にとって割が悪いと考えたからでしょう。

そこで上人は、続けて本願の意義を教えられたのですが、その時フト口をついて出たお言葉が、上人ご自身すら「かなしきかなや、善心はとしどしにしたがいてうすくなり……云々」の一句です。質問した人の言葉の中に、「われわれのお念仏と上人のお念仏とまさか一緒には考えられません」という意味を感じられたのかも知れません。上人の「口には経をよみ、身には仏を礼拝すれども、心には思はじ事のみおもわれて、一時もとどまる事なし」と打ちあけられたのも、上人の至心懺悔でしようし、誰にもあけすけ御自身の弱味をさらけ出してのご教示には、ただ頭が下がるばかりです。

こうなると、とかく他人に威張ったりしたがる凡人は、穴にでも入らずにはいられます。こうしたお言葉の次に「持戒破戒をきらわず……、有智無智をも論ぜず」と申された言葉の内容がひしひしと身に迫ってきます。持戒破戒とか有智無智とかの問題を越えていると申されるのです。世間的にどうでもよいと申されるわけでないことにも注意したいと思えます。

幽 霊 談 義

村 上 博 了



七月いよいよお盆月である。年中行事でお盆会ほど楽しく待たるものはない、お先祖まつりは笑いがやまないほど愉快なものである、どこの家庭でも精霊棚を作り胡瓜や茄子の馬を供え御馳走をいただき尚且夜は盆踊りときている。

旧暦七月のお盆は初秋である、各種の果実はみのり、秋の七草は山野を飾り、床しく風雅なものである、「浄土」編集子さんから幽霊について何にか書きなさいと御命令を拝受したのでペンをとることとする。

えている、降って現在に至っても尚文学や文芸の上に出てくる、特に雨月物語などはその代表的なものといえよう、殊に人々に広く知られているものは四谷怪談や番町皿屋敷、ぼたん灯笼である。

番町皿屋敷では女中きくさんが古井戸の傍で一枚二枚と皿を算えるし、ぼたん灯笼では幽霊がカラソコロソと下駄の音を伴奏として、フワリフワリと出てくるところがある。一体幽霊には足はないものと相場がきまっているのに、下駄の音をさせてくるところに幽霊の幽霊たるところがある。

夏の納涼おぼけ大会には幽霊はつきものであって、青白い顔、白い着物、さんばら髪或は白むくに三角紙をひたいにつけたり、手の

ひらをだらりとさげたりしているが足は見えない。

その姿を誰が作ったものであろうか、何らかの出典がある筈である、仮令想像の産物としても、どこかに典拠がなければならぬ。

幽霊があるかないかは古来から誰もが疑問とするところである。見たものがあるとい、それはただ話であって事実でないとする。だが故人である身内の人を夢みると、よくないことがありとする。親しい者の不幸な時には、なんとなく不吉な予感がすることは時とところと年令に相異があっても「ある」ものとされる。

僕は重要文化財増上寺三大蔵経中の第一宗版一切経五千七百十四巻の調査を終え目録も作り了ったところだが、阿含経をはじめ随所に地獄のことが説示されている、魂魄がない、業はないとしたならば、それは説かれなくてもよい筈である。業は幽霊の一種とも考えられる。夏の宵、うちわ片手に涼みに出ると、時には雨上りなぞには狐火が宝珠形のもの点々としたものなぞ美しいものが遠く近く見え

ることがある、晴れた晩には流星は斜にすぎ
る、人玉は初め大きくだんだん細くすうっと
水平に尾（地方によつてはノロ）を曳いてす
ぎるを見ることがある。

各高僧伝を見ると、いろいろの幽霊が出て
くる、それらの（一）（二）をあげて見たい、

その一

京都百万遍知恩寺三十三世幡随上人（後の
江戸下谷幡随院開山）が、慶長十三年（六十
七歳）武蔵国熊谷村蓮生房が遺跡を訪はんと
して門弟意天と同行二名で日暮時板橋宿にと
まった夜のことであつた、宿主である若い後
家さんが三更頃、

あああじきな世かな

と幾度か繰返し繰返しいつてゐることを聞か
れた上人が、意天に向つて、今の言葉をどう
きかれたかねと問はれた、意天は一首の歌で

我恋は 結べと帯のゆるまりて

回して見れば あじきな世や

と答えた。上人は「いや左にあらず、この婦
は定めて一子に先だたれ恩愛の悲しみをいつ
てゐるのだろうと和歌で、

みどり子が かたみに残す 風車

回して見れば あじきな世や

といわれたのであつた。

かの婦は隣室にあつて之をきいて、上人の
前に出てきて、子供の持遊んだ風車を示し
て、夫の忘れ形見として三歳になる男子を養
い、末をたのしみにしていたが、このほど空
しくなり、悲しくてたまらずこの風車を出し

見ては、せめてこの愁をまぎらはさんとして
います、人の親の心はやみではないけど、子
を思う道に迷いましたという。上人は人生の
無常止めがたいことから、弥陀如来の本願力
念仏によつて後世を弔い、一仏浄土の再会を
おまちになることが大切であるとねんごろ
にさとされた、かの婦は合掌して有難うござ
いますおかげで得脱が出来ましたといったか
とみれば、明けわたる鳥の声に住荒れたあば
らやに師弟しよう然と宿していたことが判つ
た、丁重に回向して立出でた。

その二

有名な袋中良定上人の伝には、
ある時、恒例の施食供養を終えた後、上人
は、人もなき庭上にうち向つて、汝は今尚迷

つてゐるか、哀れなるかな、どうして得脱す
ることのおそきやと、仰せられた。

これは悪趣受苦の者の幾度も現前して、上
人の眼にかかったからであらう云々といわれ
ている。又江州矢橋^{やばせ}の郷に酒店があつた、そ
この女房は、貪欲むざんの心持であつた、あ
る時ひそかに金のある旅僧を殺してしまつ
た。

かの亡魂はいたく女房を恨んで、毎日夜と
もなれば酒樽の下に現われて、家の内をきつ
とにらんでいた。之を知った女房は忽ちに狂
乱してしまった。或人が之を憐んで、上人自
筆の名号をか酒樽に張りつけたところ、悪
霊はふたたび現われることがなくなった。

その三

江戸靈巖寺開山知恩院一代である靈巖上人
が、江戸に寺院建立を誓願され靈巖島を造り
つつあつた寛永四年八月のことであつた。

数百匁の沼地、帰依の檀信徒の人々が各自
に土石を運び、有徳の人は又人夫を出して数
艘の舟で協力して間もなく出来上がろうとし
ていた時のことであつた、一カ所深淵なところ
があつて、終日に亘つて運んだ土石を一夜

の中に吹上げて、もとの淵として仕舞った、それを聞かれた上人は、そのところに行かれて、三帰五戒十念を授与せられ、

諸法はすべて幻の如し、実体とすべき

もののなし

の道理をときさとし、念仏の最勝無二の妙益であることを懇ろに説示されて御帰庵されたのであった。その夜半に二人の女子が何処からともなく現われきたって、ひそかにいわれるには、我ら三熱の苦報、果しなきを御教化によつて、救われました御高恩は報いようもありません厚く御礼を申し上げます、上人は、貴女たちは今や逢いがたい仏法にあい、弥陀の本願に帰して念仏を信づることは誠に幸なことであると、更に血脈を与えて龍譽水運海譽涌水と法名を附し十念を授けられた。二女子は、有難涙にくれ、残る地形は妾たち御礼の示しまでに平地にさせていただきますと、立ち去ったのである。夜明けて人々手に一箕を持って土を運ばんとするに深淵の跡方もなく、一夜にして平地となっていたのであった、人々は大いに驚き、何故であるうかと上人に尋ねたが、上人は莞爾とするば

かりであつた。後に門弟珂山にのみ語られたという。

幽霊はないとはいえない、さればとて之がそれだと示す訳にも行かない、精神科学や心理学上は姑くおき、今次大戦後、いろいろの人々と話あい、人々の体験を総合すると、あるとするらしい。

幽霊の正体見たや枯尾花ともいわれるけれども、仏教や基督教で極楽あり天国がありとされるならば、地獄があつても不思議ではない筈である。

僕のような凡夫には判らないけれども、見る人が見るとあるのであろう。

お墓に詣でることも香花灯明を供えることも気やすめ計りのものではない、そこには古くから人間に一貫している真理がある。

人生の正しさからそれたり、人に迷惑をかけ通したり又は世を横しまに送れば幽霊が遠寺の鐘と共に現われるであらう。

「浄土」購読規定

一部 定価 金四十円

(送料 四円)

会費一力年

金四八〇円

(送料不要)

浄土 七月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年六月廿五日 印刷

昭和三十三年七月一日 発行

定価 四十円

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

解説 増谷文雄 画 井上与志夫 詩 島田きんや

保育ののさま B5判 七色刷 美本
 (十部以上七〇円 一六円 実費)

この本は、宗祖 法然上人のご生涯とご教旨を、少年少女にわかりやすく、親しみやすい形で描きだしたものです。内容は、国宝「勅修御伝」によったものであります。

指導 外語教授 増谷文雄 画 中村ひろし
 監修 東大正大講師

教育 法然さま B5判 一〇四頁
 (十部以上一〇〇円 一四円 実費)

うつくしい絵と、やさしい童謡とで、仏の世界のイメージをおさな心の中に、植えつけるようにつとめ、お母さま方のために、それぞれの絵に解説をつけました。

若い世代の人々のために

大正大学教授
 竹 中 信 常 著

宗教心理の研究 A五判 五九〇頁
 定価 一二〇〇円 一八円 実費

宗教が現代人の心理にどのような受けとられているかということを、古来の学説史に即して説明すると共に、信仰の心理、靈感の心理、宗派心等をテーマとしてとり上げていく。宗教を理解し、信仰を他に伝えんとする者にとって必読の書である。

発行所 東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)
 青山書院

振替東京 九九三〇三番

取扱 東京都品川区上大崎一丁目七八二
 法然上人鑽仰会
 振替東京 八二一八七番

御袈裟法衣御調進

○錦金襴

○特種織物

○御水引

○御打敷

○御幡

○稚児衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚児貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺 宗務所
 大正大学 御用達
 芝中高校
 淑徳学園

東京都港区西久保巴町一〇六
野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
 振替東京七八九四五番

◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円・十八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円・二十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやまとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

値段改正中 材料値上りの為お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ2人乗	¥13,000
鎖ブランコ3人乗	¥15,000
鎖ブランコ4人乗	¥22,000
鎖ブランコ6人乗	¥26,000
椅子ブランコ4人掛	¥13,000
太鼓橋	¥10,000
ジャングルジム中型	¥28,000
単式滑台中型	¥23,000
複式滑台中型	¥36,000
動物付き遊動木	¥30,000

此他各種、一報カタログ送

配達実費（都内横浜 500 円以内
其他1000円以内）組立無料。
小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費当社・送料着払）
組立説明書送付



篠沢鉄工所

東京都大田区堤方町718
電(75)1024(池上駅東3分)

幼稚園 保育園 運動遊具
全国幼稚園・保育園・小学校・各団体に、良品を廉価に
のモットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いており
ます。松宮・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。